

第2章 食を取り巻く現状と課題

1 成田市の概要

(1) 人口・世帯

■人口は減少傾向

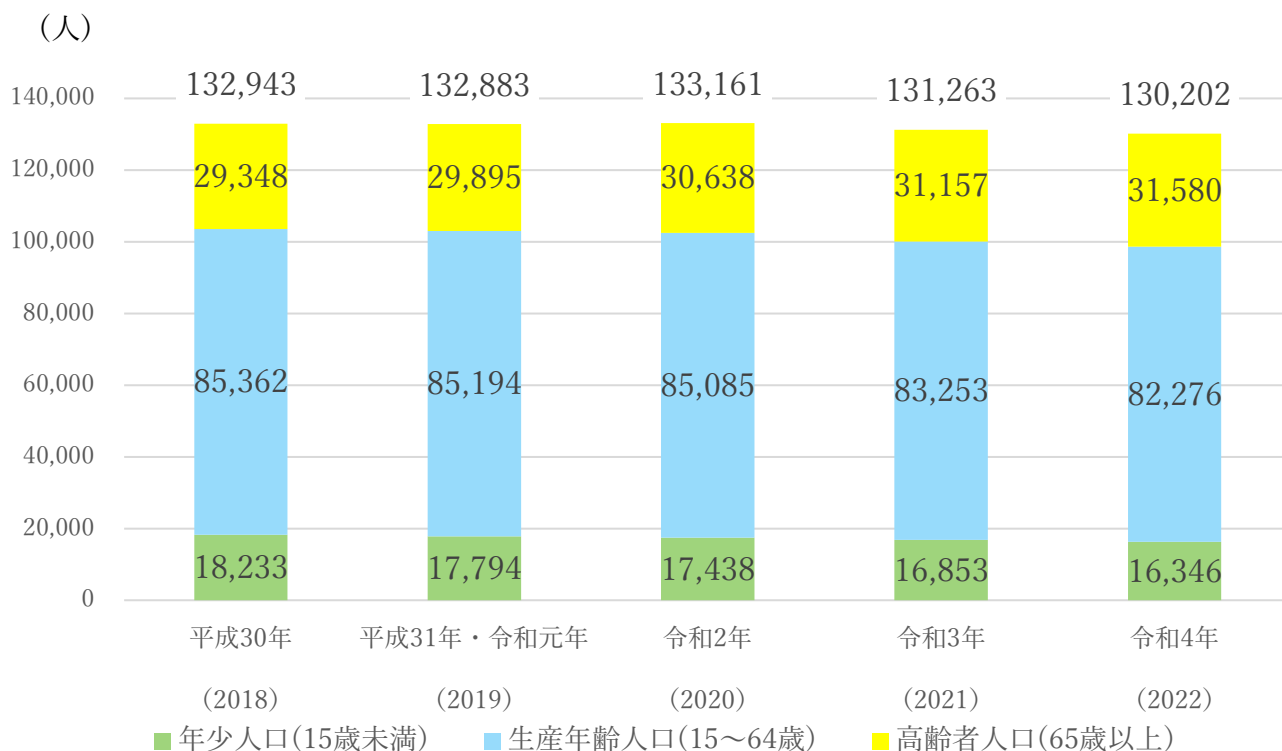
本市の人口は減少傾向にあり、令和4（2022）年では130,202人となっています。

年齢3区分人口をみると、高齢者人口は増加を続け、令和4（2022）年は31,580人、高齢化率は24.3%となっています。また、生産年齢人口及び年少人口については減少が続いており、令和4（2022）年の生産年齢人口は82,276人、生産年齢人口比率は63.2%、年少人口は16,346人、年少人口比率は12.6%となっています。

世帯数は令和2（2020）年以降減少し、令和4（2022）年は62,792世帯となっており、1世帯あたり人員は2.07人と減少が続いています。

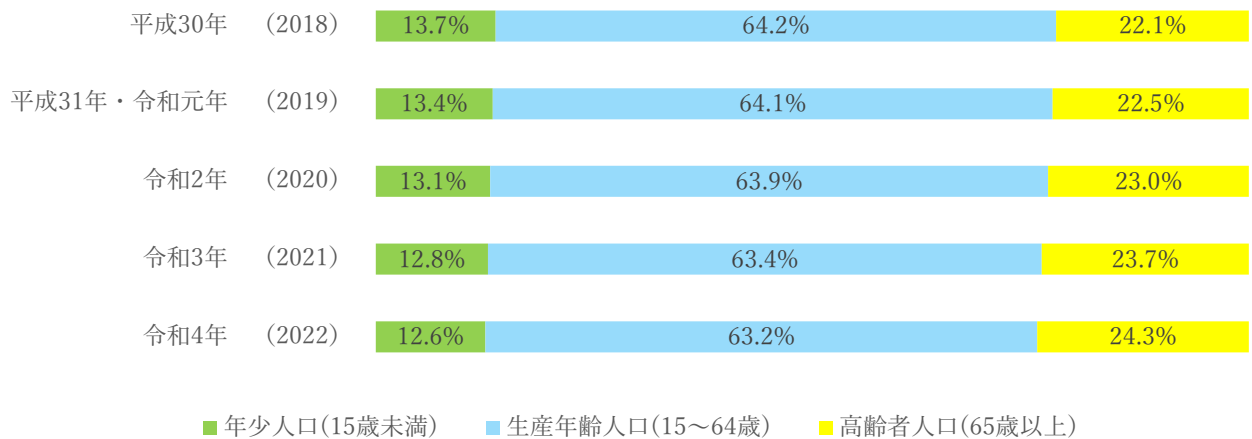
しかしながら、今後の人口推移については、成田空港の更なる機能強化や本市で実施する施策の効果により令和27（2045）年まで増加が見込まれています。（資料：成田市人口ビジョンより）

人口・年齢3区分別人口の推移



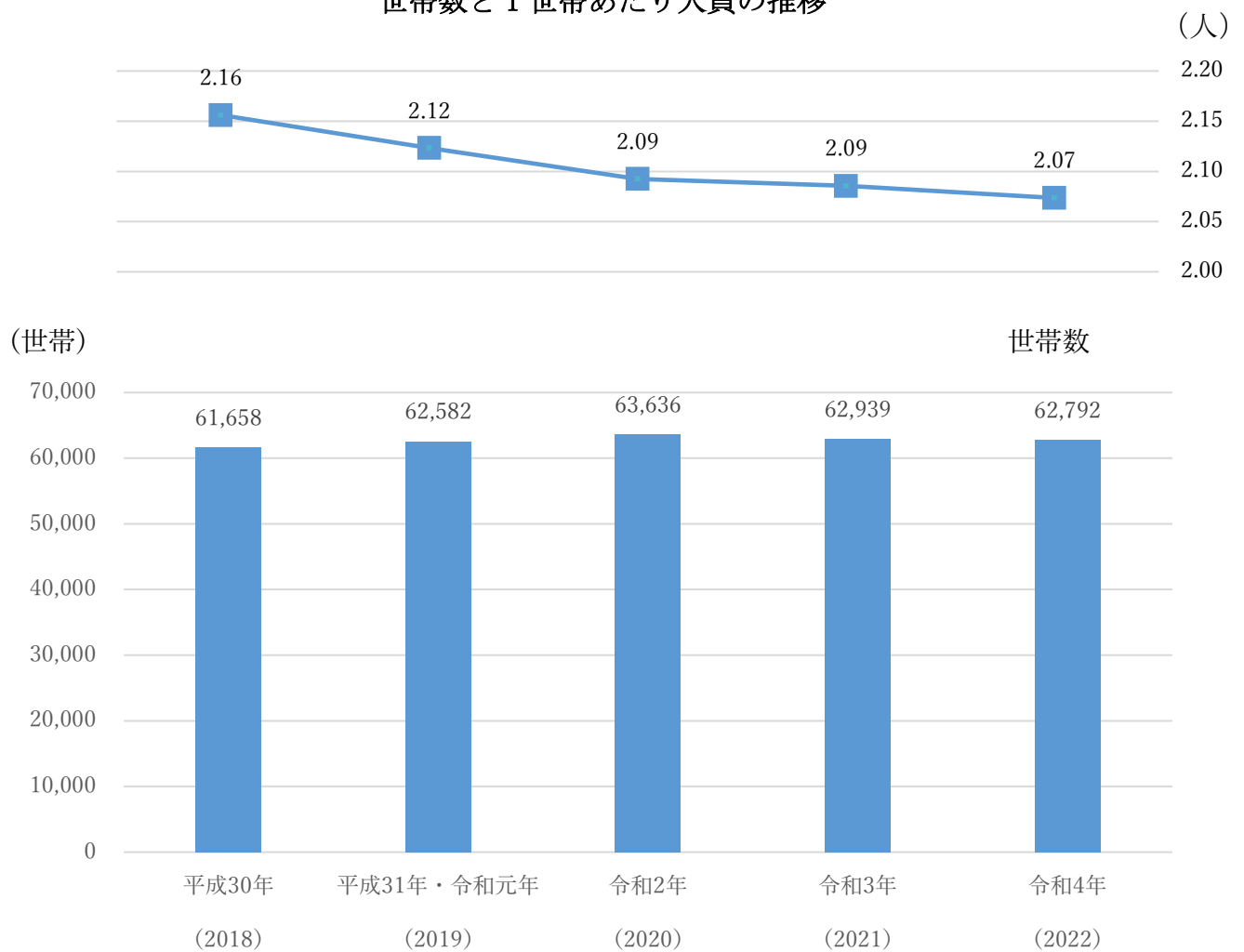
資料：千葉県年齢別・町丁字別人口（各年4月1日現在）

年齢3区分人口構成比の推移



資料：千葉県年齢別・町丁字別人口（各年4月1日現在）

世帯数と1世帯あたり人員の推移

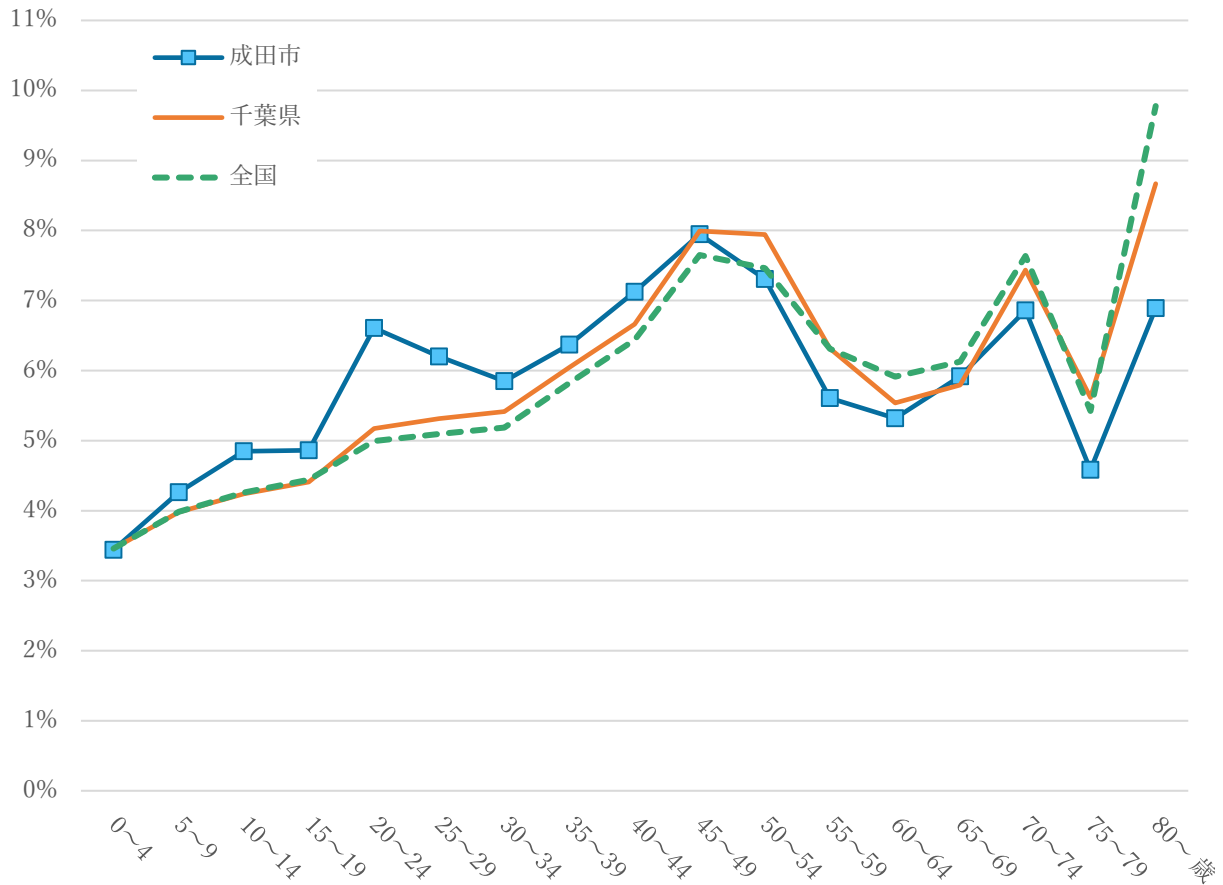


資料：千葉県年齢別・町丁字別人口（各年4月1日現在）

■働き盛りの世代が多い

令和 4（2022）年の年齢別人口構成比を国・県と比べると、本市では 5～44 歳までの割合が大きく、一方、50～64 歳、70～80 歳以上の構成比が低いことがわかります。

年齢別人口構成比の比較



資料：千葉県年齢別・町丁字別人口 令和 4（2022）年 4 月 1 日現在
総務省統計局人口推計 令和 4（2022）年 4 月 1 日現在

(2) 農業



■全国でも有数のさつまいもの産地

本市では、総面積のうち約 36%が農地（田畑）として利用されています。（資料：令和 3 年版成田市統計書より）

農家人口は減少が続いており、令和 2（2020）年 5,055 人となっています。販売農家は、令和 2（2020）年 1,391 戸ですが、農家人口に比例し、減少が続いています。

また、主業農家についても、減少が続いており、令和 2（2020）年では 404 戸となっています。

令和 2 年市町村別農業産出額（推計）によると、米が県内で 3 位、さつまいもなどのいも類が県内 1 位、全国 2 位となっています。

農家人口と農家数

単位：人、戸（経営体）

		平成 17 (2005)年※1	平成 22 (2010)年	平成 27 (2015)年	令和 2 (2020)年
農家人口※2		11,509	9,046	6,635	5,055
農家数	販売農家	2,493	2,067	1,651	1,391
	自給的農家	346	453	511	465
	農家総数	2,839	2,520	2,162	1,856
主副業別	主業※2	738	641	488	404
	準主業※2	587	499	298	190
	副業的※2	1,168	927	865	798

資料：農林業センサス（各年 2 月 1 日現在）

※1 平成 17（2005）年は旧 3 市町の合計

※2 平成 27（2015）年までは販売農家、令和 2（2020）年は個人経営体における数値

■学校給食では年間を通して成田産食材を活用

本市では、児童生徒が地域の自然や食文化、身近な生産者の方々の努力や食に対する関心を深めることができるよう成田産食材の活用を図っています。

成田産食材の給食活用状況 令和3（2021）年度

…食材の使用月を示しています



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
米												
人参												
大根												
長ネギ												
玉ねぎ												
じゃがいも												
さつまい												
ごぼう												
レンコン												
ほうれん草												
キャベツ												
小松菜												
チンゲン菜												
白菜												
きゅうり												
かぶ												
とうもろこし												
ブロッコリー												
トマト												
セロリ												
青ピーマン												
メロン												
栗												

資料：学校給食センター

■市民農園と農業体験教室

本市では、自然とふれあえる場として、市民農園の貸し出しを行っています。

本市で管理している市民農園のほかに、民間で経営管理をしている農園が6つあり、それぞれ多くの方々が利用されています。

また、親子農業体験教室と題して、自然とふれあい、収穫の喜びを感じようと、毎年、親子で参加できるイベントを実施しています。

市民農園の設置状況

単位：区画

農園名	地区	区画数
成田市民農園（市営）	十余三	123
御料ふれあい農園	三里塚御料	28
並木町ふれあい農園	並木町	124
山王ふれあい農園	公津の杜	100
台畑農園	北須賀	42
京相農園	八代	35
坂田ヶ池ファーム	大竹	18

資料：農政課 令和4（2022）年8月現在



親子農業体験教室の参加状況

単位：組、人

	参加家族数	参加者数
平成 30（2018）年度	25	103
平成 31・令和元（2019）年度	14	54
令和 2（2020）年度※		
令和 3（2021）年度	12	52
令和 4（2022）年度	9	37

資料：農政課

※令和 2（2020）年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施していない。

＜市内で行われている農業体験教室の様子＞



(3) 食育に関する民間の活動

■「ちば食育ボランティア」の活動状況

「ちば食育ボランティア」は、学校教育や地域活動の場で「食」や「農林水産」に関する知識や経験などを話したり、郷土料理などの調理実習、農業体験の受け入れなどを実施したりするボランティアです。

本市には「ちば食育ボランティア」の登録者が9人います。

本市におけるちば食育ボランティアの登録人数

単位：団体、人

		成田市					千葉県
		登録分野					
		食生活改善	地産地消	農林水産業	料理	その他「食」や「農」に関するもの	
団体登録者	—	—	—	—	—	—	3,577
個人登録者	9	3	4	2	3	1	164
合計	9	3	4	2	3	1	3,741

資料：千葉県「ちば食育ボランティア名簿」 令和4（2022）年6月現在

※登録分野は複数登録されているため合計は一致しない。

■環境にやさしい農業への取り組み

千葉県では、環境にやさしい農業を進めるため、化学合成農薬と化学肥料を通常の2分の1以下に減らして栽培した農産物を「ちばエコ農産物」として認定しています。

市内には、「ちばエコ農産物」を取り扱っている直売所やスーパーなどの販売協力店が9店舗あります。

「ちば食育サポート企業」は、企業が独自に行う食育活動、または、公的機関や「ちば食育ボランティア」が実践する食育活動に支援・協力している企業として、千葉県が募集し登録した企業です。千葉県や市町村、学校、幼稚園、保育所等、ちば食育ボランティアが主体となって行う食育活動にあたり、見学の受け入れ、講師の派遣、調理施設の提供などの支援・協力をしています。

ちばエコ農産物販売協力店舗数・ちば食育サポート企業数

単位：店舗、企業

項 目	成田市	千葉県
ちばエコ農産物販売協力店舗数 令和4（2022）年3月31日現在	9	396
ちば食育サポート企業数 令和4（2022）年4月1日現在	2	77

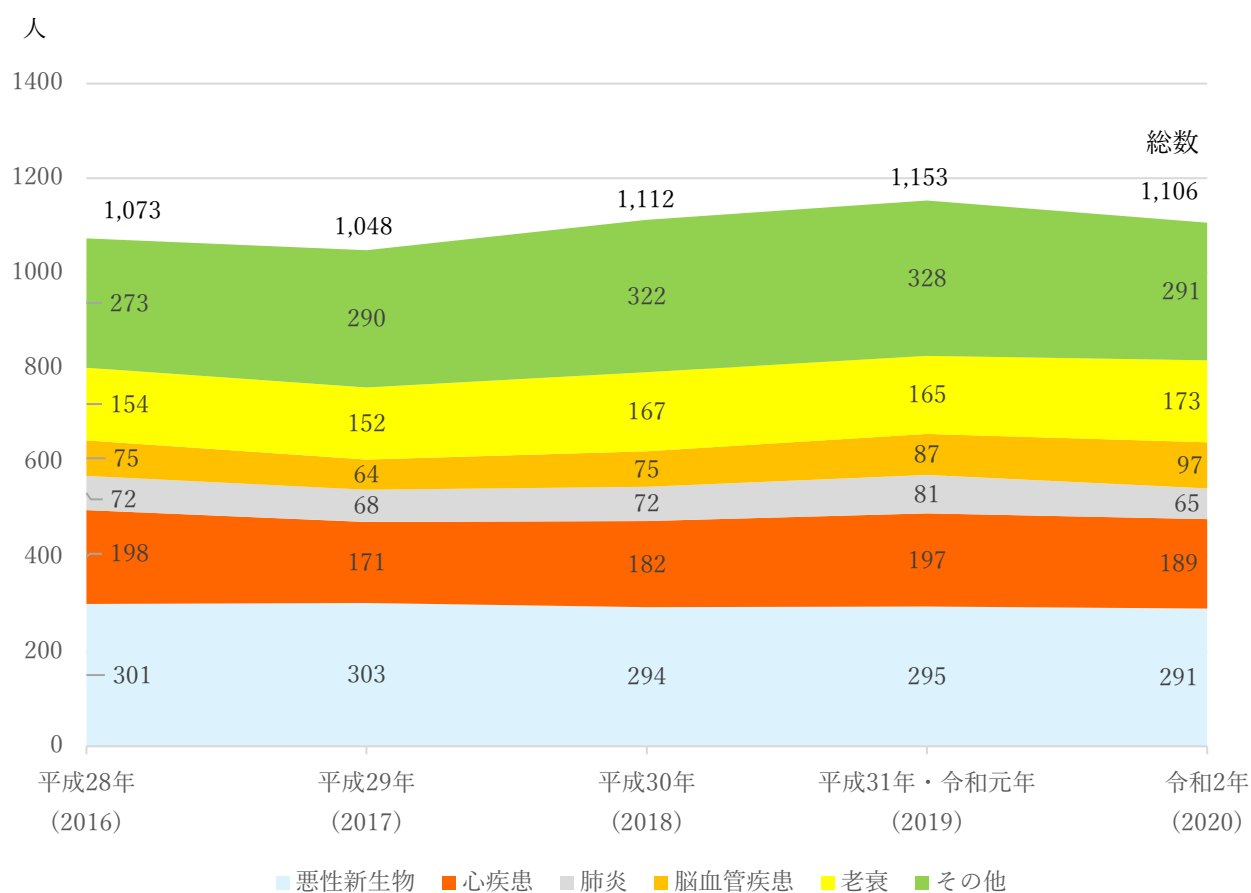
資料：千葉県

(4) 健康の状況

■生活習慣病による死亡者が半数

主要死因別死亡者数は、悪性新生物（がん）、心疾患、老衰、脳血管疾患が上位で推移していますが、生活習慣病による死亡者が半数を占めています。生活習慣病には、日常の食習慣などが深く関わっていることから、栄養バランスを考えた毎日の食生活が大切となります。

本市における主要死因別死亡者数の推移



資料：千葉県衛生統計年報

■平均自立期間は、65 歳から男性が約 18 年、女性が約 21 年

平均余命※¹は、平成 30（2018）年時点で、65 歳男性 19.34 年、65 歳女性 23.94 年と伸びています。

一方で、県と比較すると男性、女性いずれも本市はやや下回ります。

平均自立期間※²は、平成 30（2018）年時点で、65 歳男性 17.91 年、65 歳女性 20.78 年と伸びています。

一方で、県と比較すると男性、女性いずれも本市はやや下回ります。

※1 平均余命

ある年齢の人々がその後生きられる平均の年数。

※2 平均自立期間

日常生活に介護を要しない、要介護 2 以上の認定を受けるまでの期間。

平均余命と平均自立期間の推移

単位：年

	65 歳男性			
	平均余命		平均自立期間	
	平成 26 (2014) 年	平成 30 (2018) 年	平成 26 (2014) 年	平成 30 (2018) 年
千葉県	19.05	19.61	17.47	18.03
成田市	18.39	19.34	17.10	17.91

	65 歳女性			
	平均余命		平均自立期間	
	平成 26 (2014) 年	平成 30 (2018) 年	平成 26 (2014) 年	平成 30 (2018) 年
千葉県	23.61	24.27	20.27	20.91
成田市	23.14	23.94	20.38	20.78

資料：千葉県健康情報ナビ

2 食に関する意識調査

食に関する実態や、食育に関するニーズを把握するため、一般市民及び小学 5 年生、中学 2 年生、高校 2 年生、外国人を対象に、アンケート調査を令和 4（2022）年に実施しました。

なお、比較で掲載している前回調査は、平成 28（2016）年度のアンケート調査の結果です。

○調査の概要

項 目	①一般市民調査	②小中学生調査	③高校生調査	④外国人調査
調査対象	市内在住の 20 歳以上の市民※	市内公立小中学校に通う小学 5 年生・中学 2 年生の児童生徒全員（義務教育学校含む）	市内公立高等学校に通う高校 2 年生の生徒全員	ALT 関係者
調査方法	紙アンケート （郵送）	WEB アンケート	WEB アンケート	紙アンケート （個別配付）
調査期間 （調査日）	令和 4（2022）年 2 月 14 日～3 月 31 日	令和 4（2022）年 2 月 14 日～3 月 31 日	令和 4（2022）年 6 月 13 日～7 月 29 日	令和 4（2022）年 7 月 26 日
抽出数	2,000 件	2,399 件	821 件	47 件
有効回収数	844 件	2,059 件	527 件	47 件
有効回収率	42.2%	85.8%	64.2%	100.0%

※ 抽出条件

- 世帯内重複を除く
- 外国人を除く

■食に関する意識調査を読む際の留意点

- 調査結果の比率は、その設問の回答者を基数として、小数点以下第 2 位を四捨五入して算出しています。そのため、合計が 100%にならない場合があります。
- 複数回答形式の場合、回答比率の合計は通常 100%を超えます。
- 掲載している表は、年代・性別の無回答者がいるため、全体と内訳が一致しません。

(1) 市民への食育の普及

■「食育」に関心を持っている人の割合

一般・・・78.4%

外国人・・・42.6%

【一般】

食育への関心について、「ある」(28.6%)と「どちらかといえばある」(49.8%)を合わせた『ある』は、78.4%となっています。

年代別では、「食育」に関心が『ある』との回答は、40歳代で最も高く、83.1%となっています。

また、20歳代では「どちらかといえはない」(15.4%)と「ない」(14.1%)を合わせた、「食育」に関心が『ない』との回答は、29.5%と他の年代を上回ります。

(前回調査との比較)

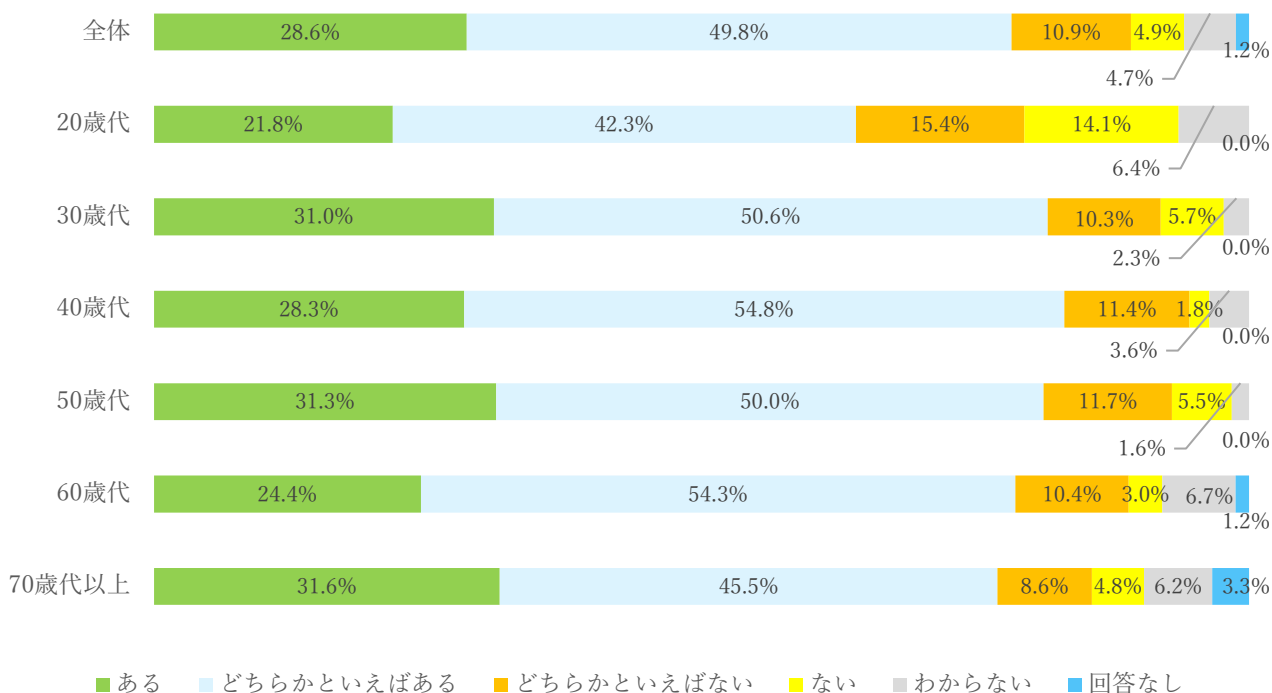
食育への関心が『ある』との回答は増加しており、関心が高まっていることがわかります。

【外国人】

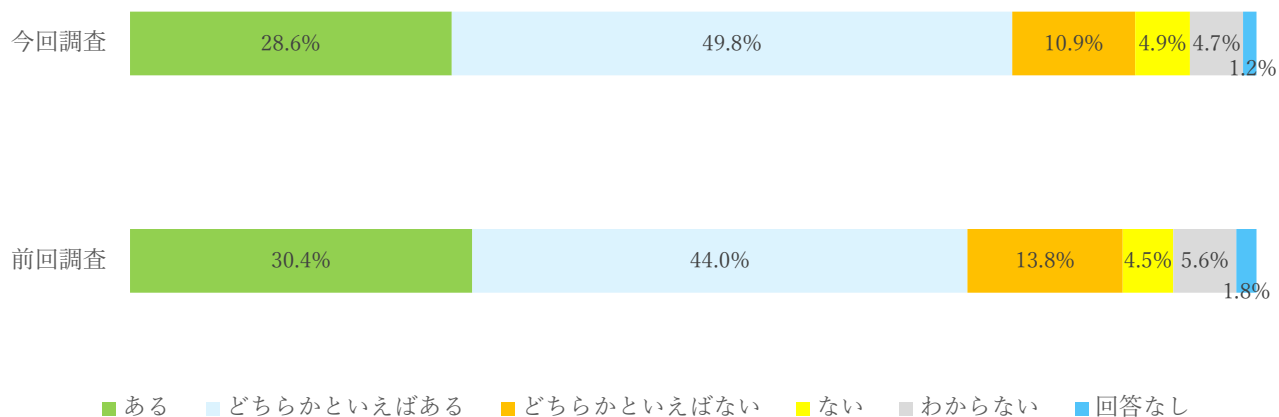
選択肢が異なるため、単純に比較はできませんが「ある」との回答は、42.6%と一般を大きく下回っています。

「食育」への関心について

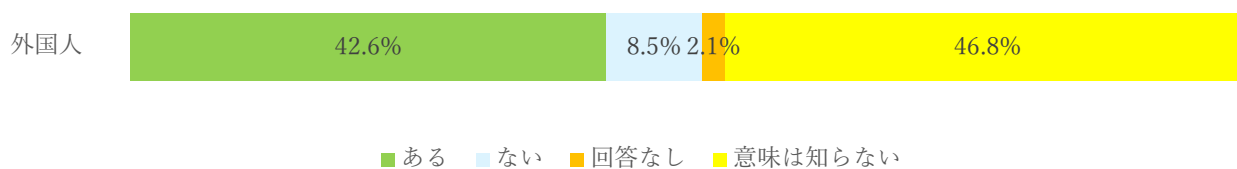
【一般】



(前回調査との比較)



【外国人】



■「食育」を実践している人の割合

一般・・・56.0%

外国人・・・38.3%

【一般】

食育の実践について、「積極的にしている」(6.0%)と「できるだけ、するようにしている」(50.0%)を合わせた『している』との回答は56.0%となっています。

年代別では、『している』との回答は、40歳代で最も高く、62.6%となっています。

また、20歳代では「あまりしていない」(26.9%)と「していない」(20.5%)を合わせた『していない』との回答は、47.4%と他の年代を上回ります。

(前回調査との比較)

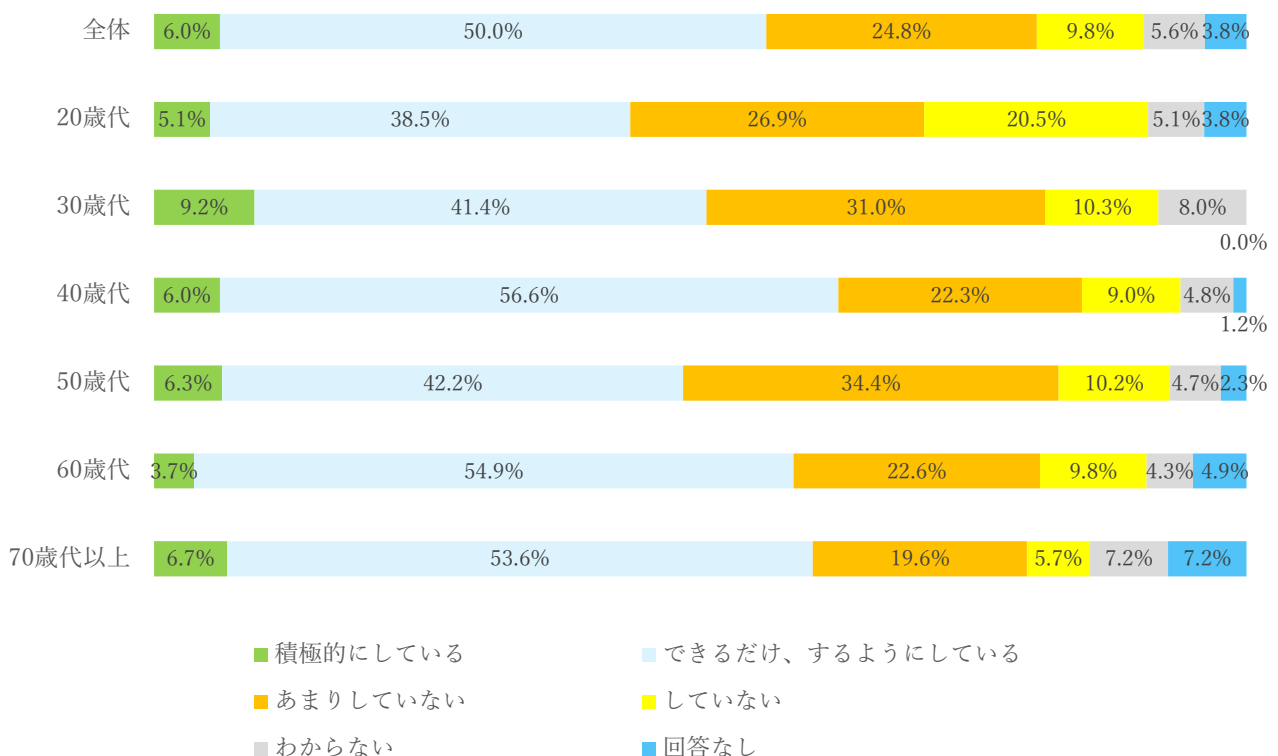
食育の実践を『している』との回答は、増加しており、関心が高まっていることがわかります。

【外国人】

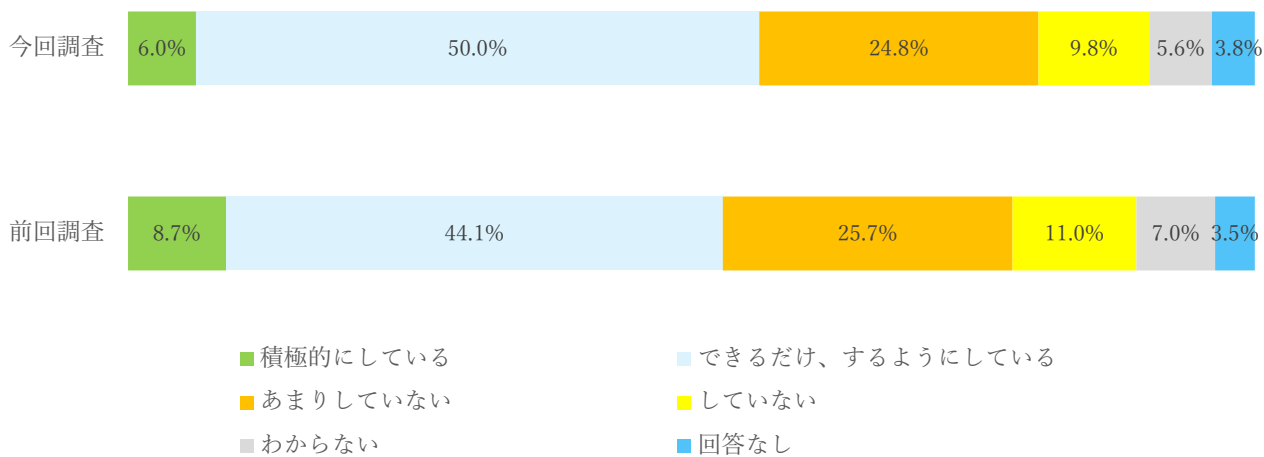
選択肢が異なるため、単純に比較はできませんが「している」との回答は、38.3%と一般を下回っています。

日頃から「食育」を実践しているか

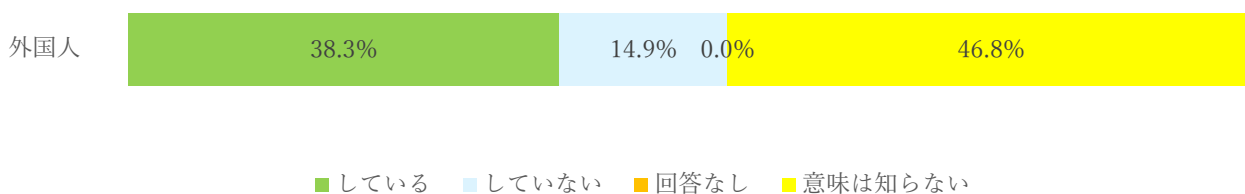
【一般】



(前回調査との比較)



【外国人】



(2) 健全な食生活で、元気なからだを育む

■「食事バランスガイド」等の食生活上の指針を参考に行っている人の割合

一般・・・47.9%

外国人・・・61.7%

【一般】

食生活で参考に行っている指針では、「特になし」が48.0%で最も多くなっていますが、「食事バランスガイド」(22.6%)、「6つの基礎食品」(20.5%)、「3色分類」(16.0%)などが上位にあげられています。

年代別では、すべての年代で、「特になし」が最も高く、60歳代では「6つの基礎食品」との回答が他の年代を大きく上回っています。

(前回調査との比較)

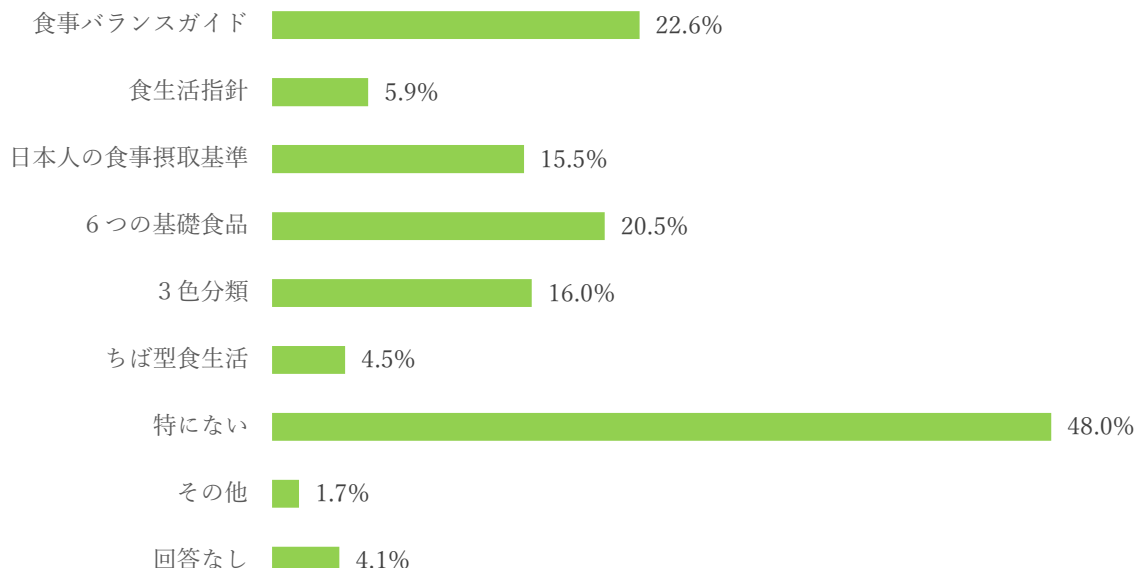
前回調査と比較すると、「特になし」との回答が増加しています。また、それに伴い「日本人の食事摂取基準」以外の指針は、今回調査では減少しています。

【外国人】

健全な食生活を実践するため、栄養基準（出身国の基準も含む。）などを参考に行っている人は61.7%となっており、一般を上回っています。

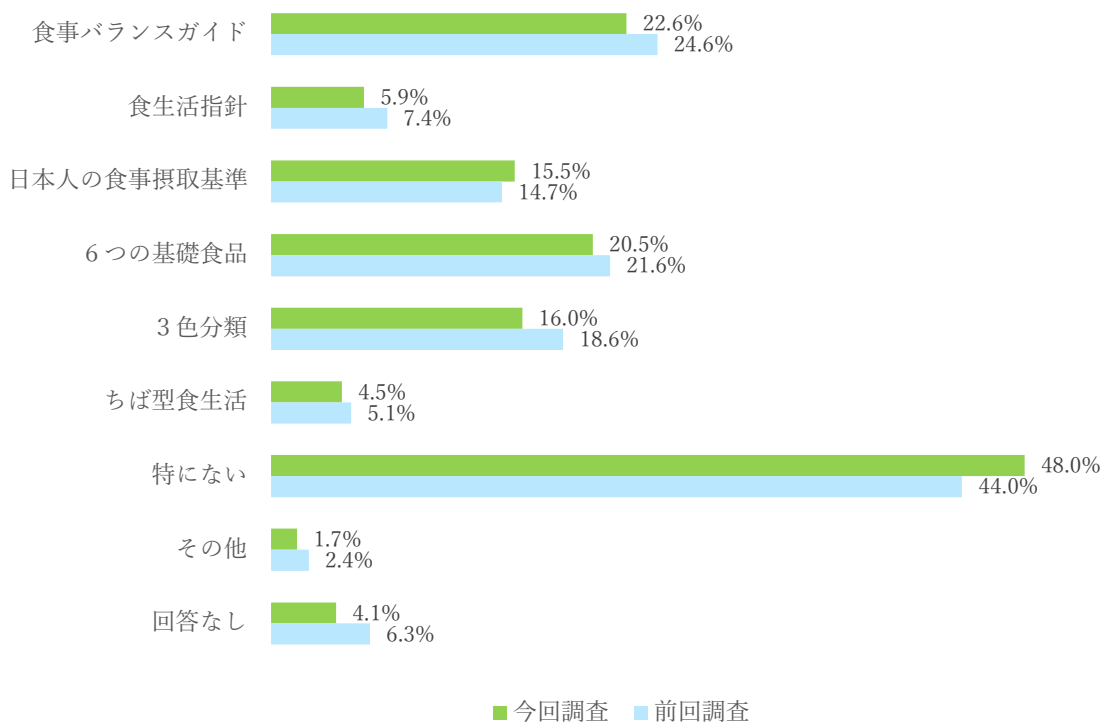
食生活で参考に行っている指針（複数回答）

【一般】



		回答者数	食事バランスガイド	食生活指針	日本人の食事摂取基準	6つの基礎食品	3色分類	ちば型食生活	特にない	その他	回答なし
全体		844人	22.6%	5.9%	15.5%	20.5%	16.0%	4.5%	48.0%	1.7%	4.1%
年代	20歳代	78人	21.8%	7.7%	17.9%	15.4%	19.2%	2.6%	48.7%	1.3%	2.6%
	30歳代	87人	16.1%	8.0%	19.5%	19.5%	21.8%	4.6%	46.0%	2.3%	0.0%
	40歳代	166人	25.3%	2.4%	14.5%	19.3%	17.5%	3.6%	51.8%	0.6%	0.0%
	50歳代	128人	14.1%	6.3%	17.2%	21.1%	13.3%	3.1%	50.0%	3.1%	1.6%
	60歳代	164人	28.7%	4.9%	13.4%	27.4%	17.1%	5.5%	47.6%	1.2%	3.7%
	70歳代以上	209人	23.9%	7.2%	13.9%	18.2%	12.4%	5.3%	45.0%	1.9%	11.5%

(前回調査との比較)



【外国人】

外国人



■ 参考にしている ■ 参考にしていない ■ わからない

■1日2回以上栄養バランスのとれた食事を心がけている人の割合

一般・・・66.9%

外国人・・・93.6%

【一般】

栄養バランスのとれた食事を1日2回以上心がけている人は、「はい」が66.9%となっています。

年代別では、年代が高くなるほど、バランスのとれた食事を心がけている人の割合が多い傾向にあります。

(前回調査との比較)

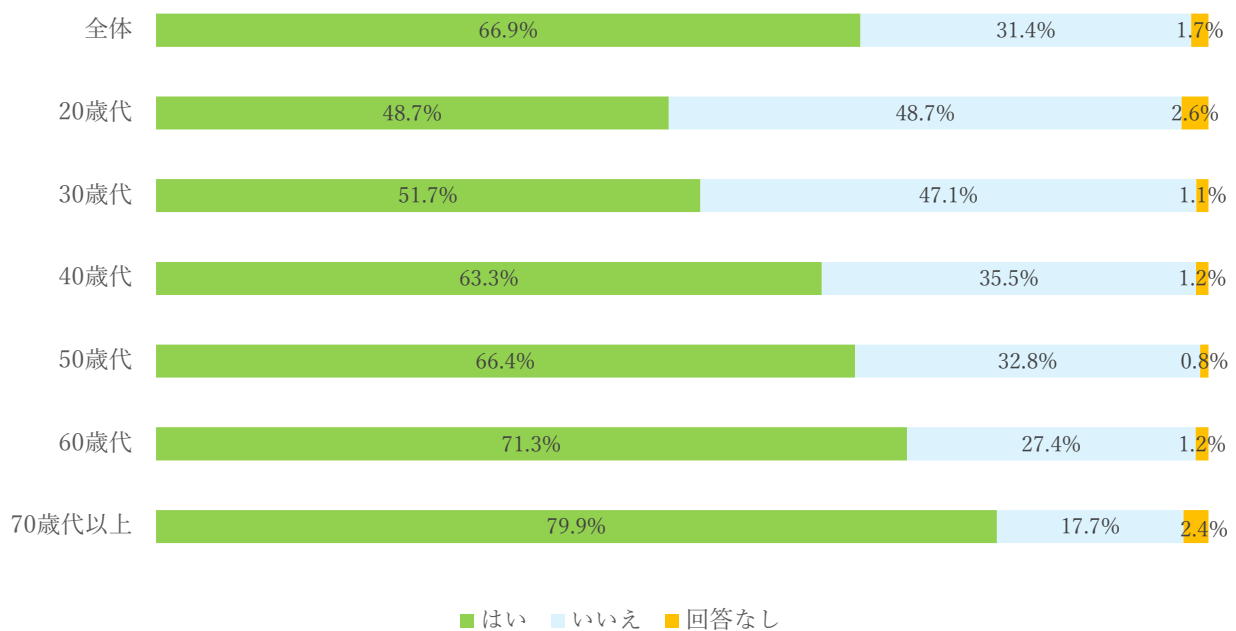
「はい」との回答は、前回調査に比べ減少しています。

【外国人】

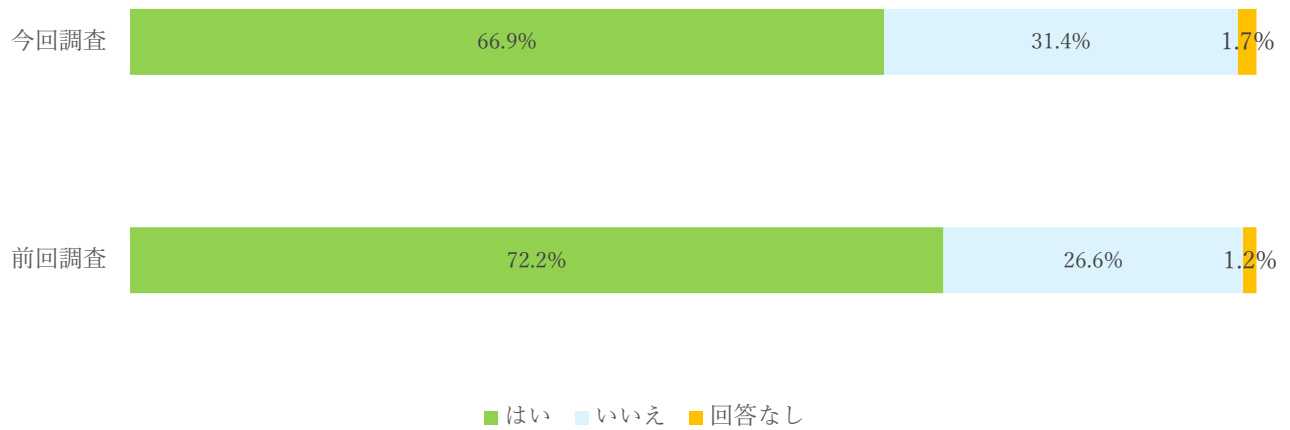
栄養バランスのとれた食事を1日2回以上心がけている人は、93.6%となっており、一般を大きく上回っています。

1日2回以上栄養バランスのとれた食事を心がけているか

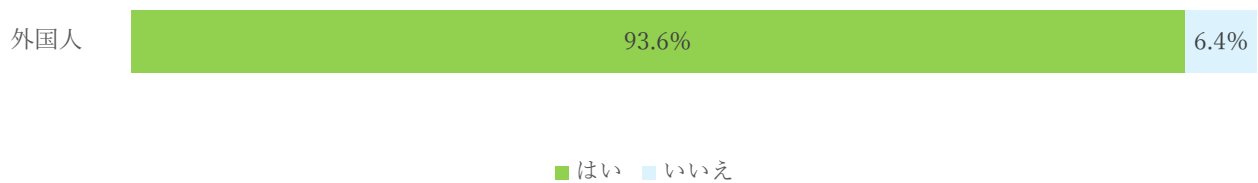
【一般】



(前回調査との比較)



【外国人】



■朝食を食べている人の割合

一般・・・80.7%

小中学生・・・83.8%

高校生・・・65.3%

外国人・・・53.2%

【一般】

朝食の習慣では、「ほぼ毎日食べている」が80.7%となっています。

性別では、女性に比べ男性で「ほとんど食べない」と回答する人が多くなっています。

性・年代別では、「ほとんど食べない」や「週に2～3日食べる」との回答は、20～40歳代の男性が他の年代より多く、20歳代の女性では3割を超えており、働き盛りの男性や若い女性で朝食の欠食が多い状況がうかがえます。

（前回調査との比較）

「ほぼ毎日食べている」との回答は、前回調査から減少し、「週に4～5日食べる」「週に2～3日食べる」「ほとんど食べない」との回答が増加しています。

【小中学生】

朝ごはんの習慣では、「毎日食べている」が小学5年生で85.6%、中学2年生で81.9%となっています。

学年別では、朝ごはんを『食べない』（週に1日でも食べないことがある）割合は、小学5年生に比べ中学2年生で多くなっています。

性・学年別でみると、『食べない』割合は、男女ともに中学2年生で多くなっています。

（前回調査との比較）

前回調査と比較すると、小学5年生・中学2年生ともに「毎日食べている」との回答は上昇しています。

【高校生】

朝食の習慣では、「毎日食べている」が65.3%となっており、小・中学生と比較すると、朝食欠食率は高くなっています。

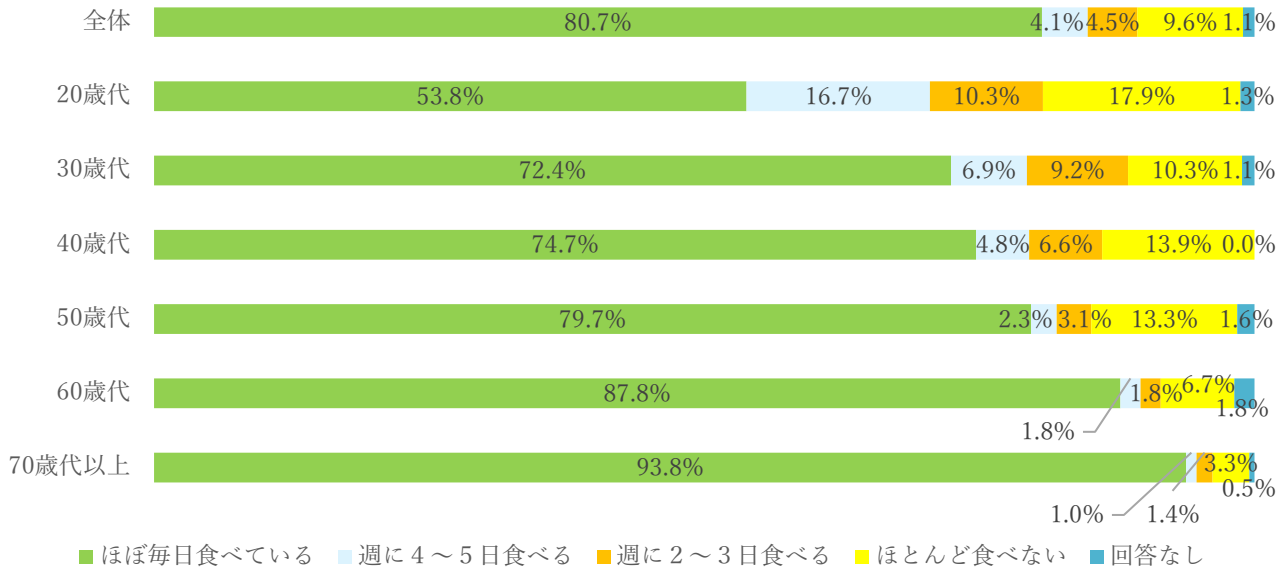
性・学年別でみると、『食べない』割合は、男子で多くなっています。

【外国人】

「ほぼ毎日食べている」との回答は、53.2%となっており、一般と比較すると、欠食率は高くなっています。

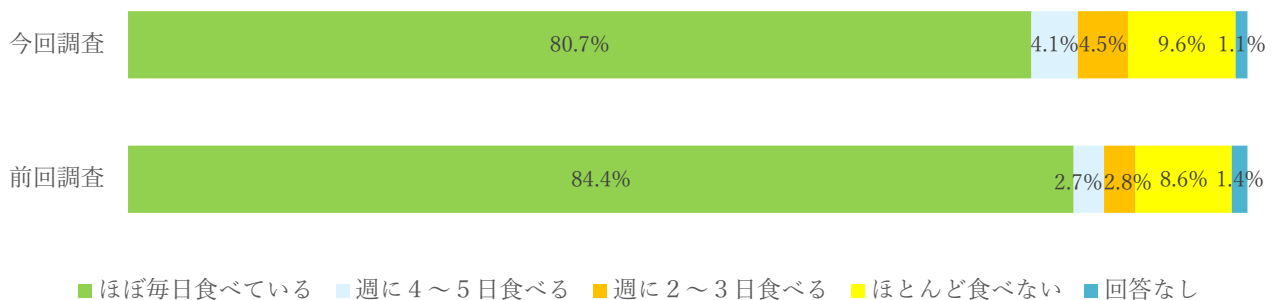
朝食を食べているか

【一般】

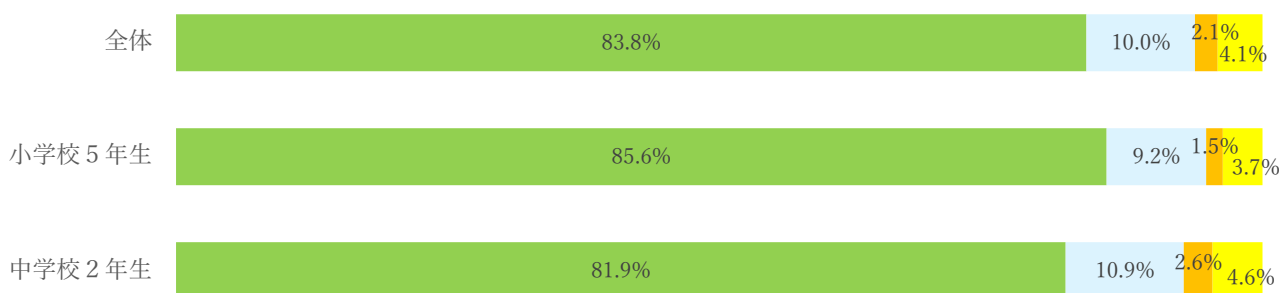


		回答者数	ほぼ毎日食べている	週に4～5日食べる	週に2～3日食べる	ほとんど食べない	回答なし
全体		844人	80.7%	4.1%	4.5%	9.6%	1.1%
性別	男性	332人	75.9%	4.8%	5.7%	11.7%	1.8%
	女性	406人	84.5%	3.7%	3.7%	7.9%	0.2%
男性	20歳代	31人	54.8%	19.4%	12.9%	9.7%	3.2%
	30歳代	37人	59.5%	8.1%	16.2%	13.5%	2.7%
	40歳代	52人	67.3%	5.8%	7.7%	19.2%	0.0%
	50歳代	60人	73.3%	3.3%	5.0%	16.7%	1.7%
	60歳代	66人	81.8%	3.0%	3.0%	9.1%	3.0%
	70歳代以上	86人	93.0%	0.0%	0.0%	5.8%	1.2%
女性	20歳代	41人	56.1%	9.8%	9.8%	24.4%	0.0%
	30歳代	50人	82.0%	6.0%	4.0%	8.0%	0.0%
	40歳代	90人	80.0%	5.6%	5.6%	8.9%	0.0%
	50歳代	55人	87.3%	1.8%	1.8%	7.3%	1.8%
	60歳代	83人	92.8%	1.2%	1.2%	4.8%	0.0%
	70歳代以上	84人	94.0%	1.2%	2.4%	2.4%	0.0%

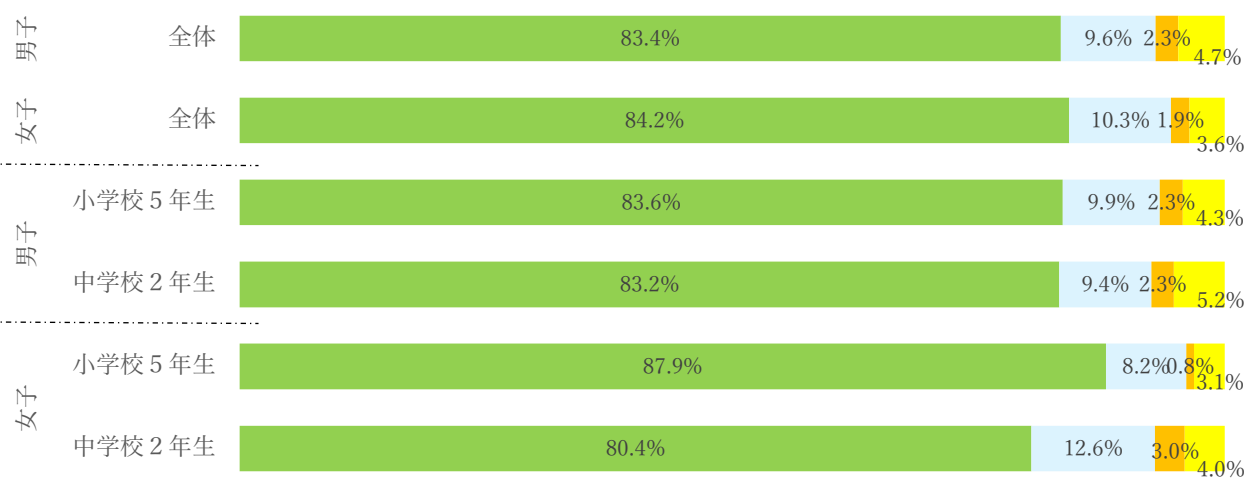
(前回調査との比較)



【小中学生】

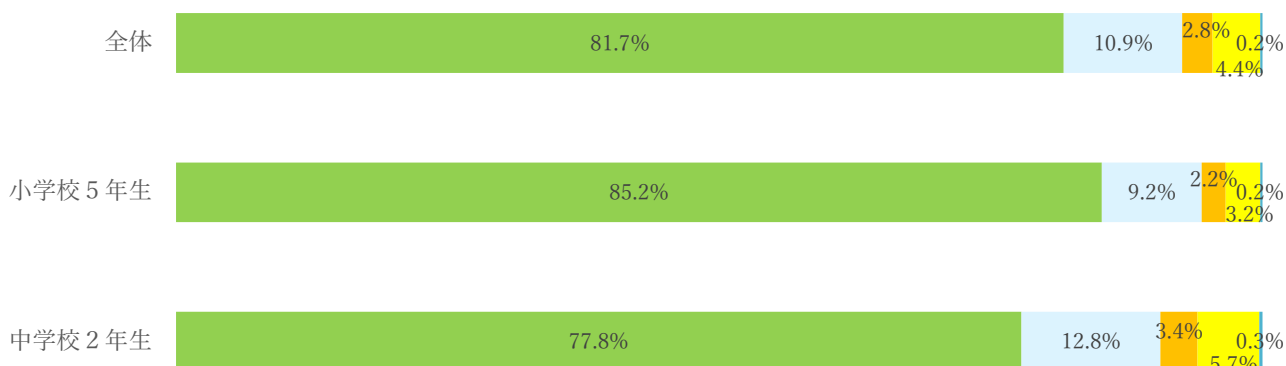


■ 毎日食べている
 ■ 1週間に1～2日 食べないことがある
 ■ 1週間に3～4日 食べないことがある
 ■ 食べないことが多い



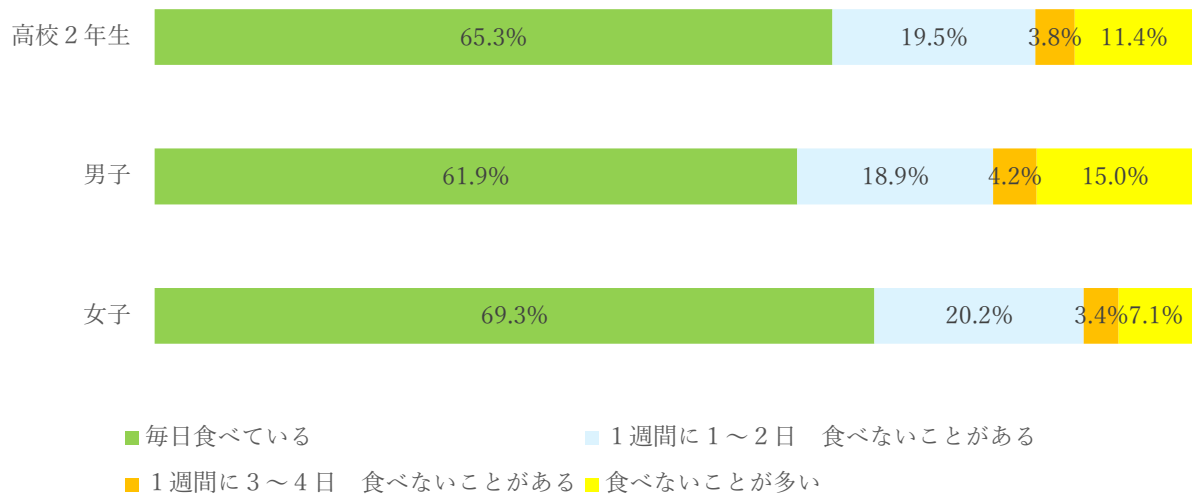
■ 毎日食べている
 ■ 1週間に1～2日 食べないことがある
 ■ 1週間に3～4日 食べないことがある
 ■ 食べないことが多い

(前回調査)



■ 毎日食べている
 ■ 1週間に1～2日 食べないことがある
 ■ 1週間に3～4日 食べないことがある
 ■ 食べないことが多い
 ■ 無回答

【高校生】



【外国人】



■週に1回以上家族や友人と食事をする人の割合

一般・・・86.4%

外国人・・・95.7%

【一般】

家族、友人との食事状況は、「毎食」が35.7%で最も多く、週1回以上家族や友人と食事をしている人は、86.4%となっています。

年代別では、30歳代以上では「毎食」、20歳代では「週1～3回」との回答が最も多くなっています。また、特に40歳代では、週1回以上家族や友人と食事をしている人は、95.8%となっており他の年代を上回っています。

（前回調査との比較）

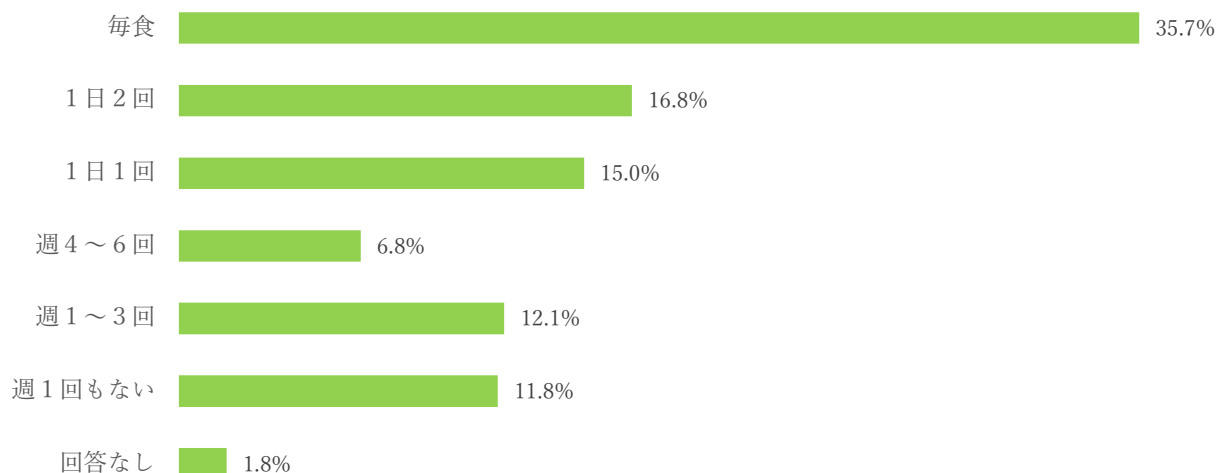
前回調査と比較すると、家族や友人との食事状況は、「週1回もない」との回答が増加しています。

【外国人】

週1回以上家族や友人と食事をしている人は、95.7%となっており、一般より高い割合となっています。

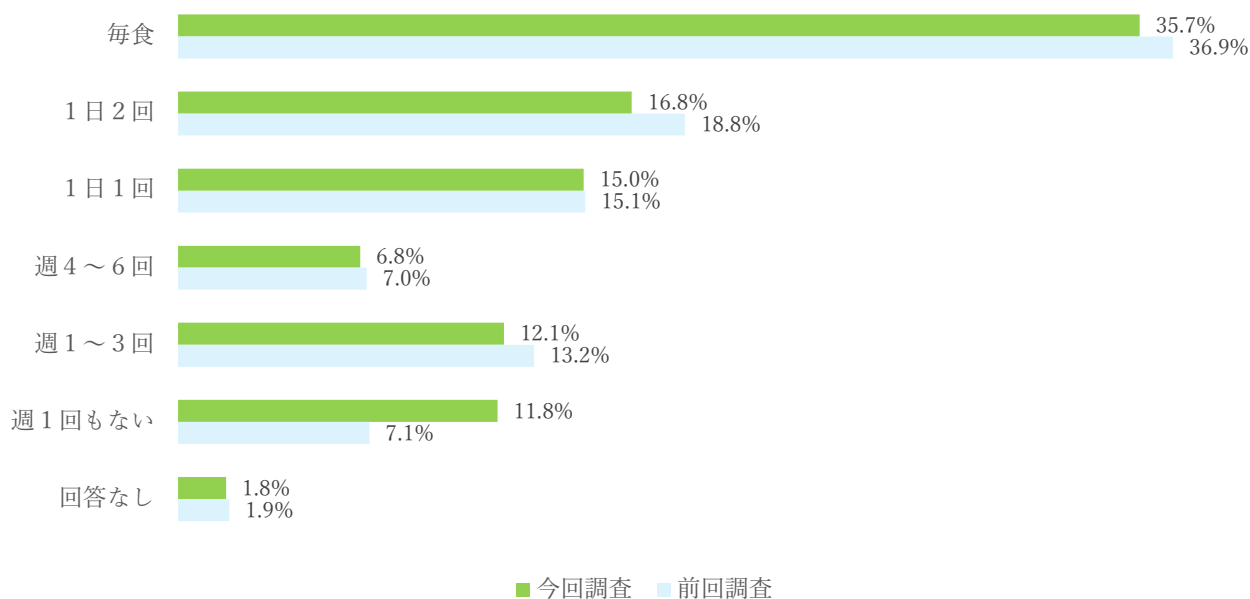
家族や友人と一緒に食事をする頻度

【一般】

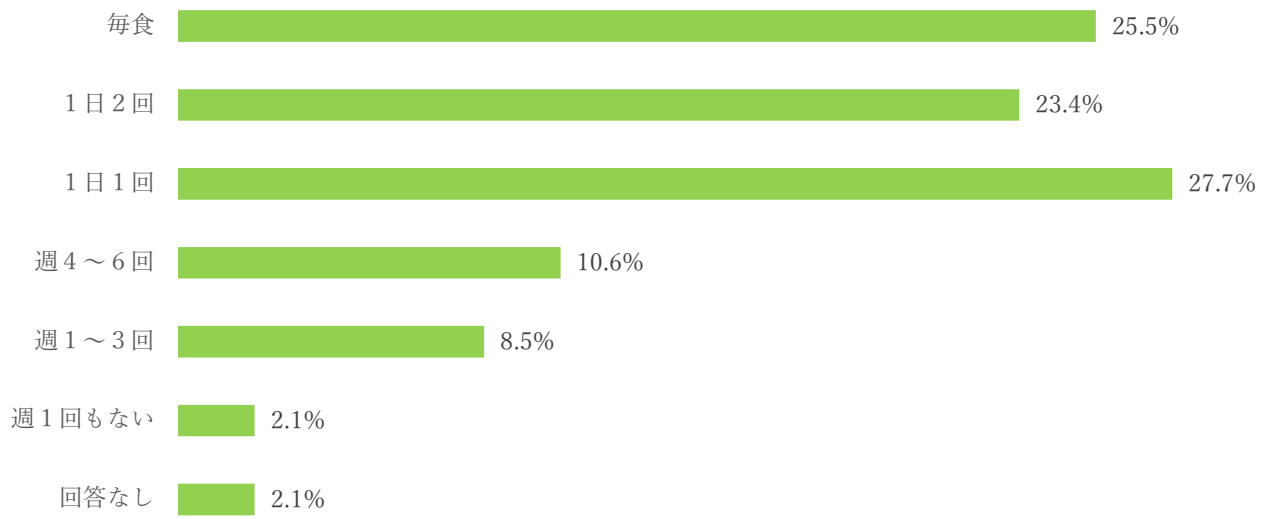


		回 答 者 数	毎 食	1 日 2 回	1 日 1 回	週 4 ～ 6 回	週 1 ～ 3 回	週 1 回 も ない	回 答 なし
	全体	844人	35.7%	16.8%	15.0%	6.8%	12.1%	11.8%	1.8%
年 代	20歳代	78人	17.9%	11.5%	17.9%	14.1%	20.5%	15.4%	2.6%
	30歳代	87人	34.5%	20.7%	14.9%	6.9%	12.6%	10.3%	0.0%
	40歳代	166人	28.3%	24.7%	20.5%	6.6%	15.7%	4.2%	0.0%
	50歳代	128人	31.3%	16.4%	23.4%	7.8%	10.2%	10.2%	0.8%
	60歳代	164人	42.7%	17.1%	14.0%	7.9%	6.1%	11.6%	0.6%
	70歳代以上	209人	45.5%	11.5%	6.2%	2.4%	11.5%	17.7%	5.3%

(前回調査との比較)



【外国人】



(3) 安全・安心な食の環境づくり

■食品を購入する際、栄養成分表示を参考にしている人の割合

一般・・・53.5%

外国人・・・76.6%

【一般】

食品購入時に栄養成分表示を参考にしているかについては、「参考にしている」(15.3%)と「ときどき参考にしている」(38.2%)を合わせた『参考にしている』が53.5%となっています。

年代別では、30歳代で『参考にしている』割合が58.6%となっており、他の年代を上回っています。

(前回調査との比較)

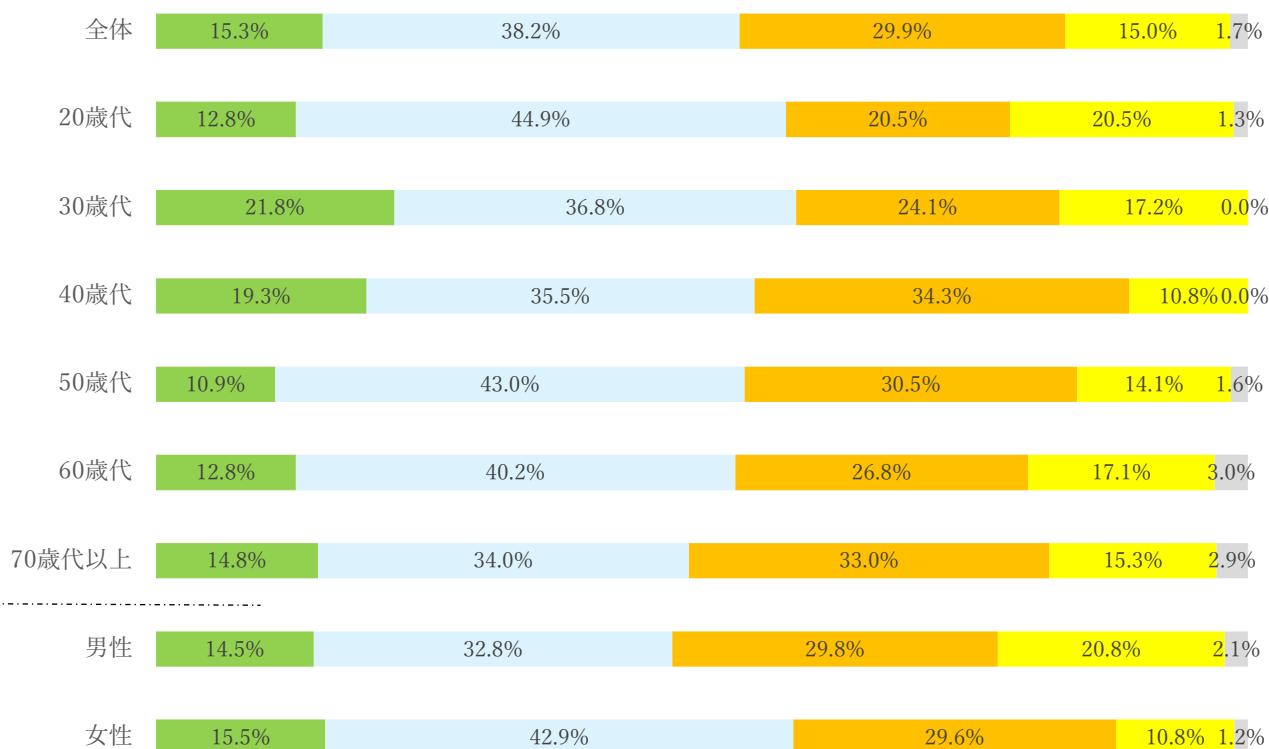
食品購入時に栄養成分表示を『参考にしている』割合は、前回調査から横ばいとなっています。

【外国人】

選択肢が異なるため、単純に比較はできませんが「参考にしている」(76.6%)は一般より高い割合となっており、参考にしている人が多くなっています。

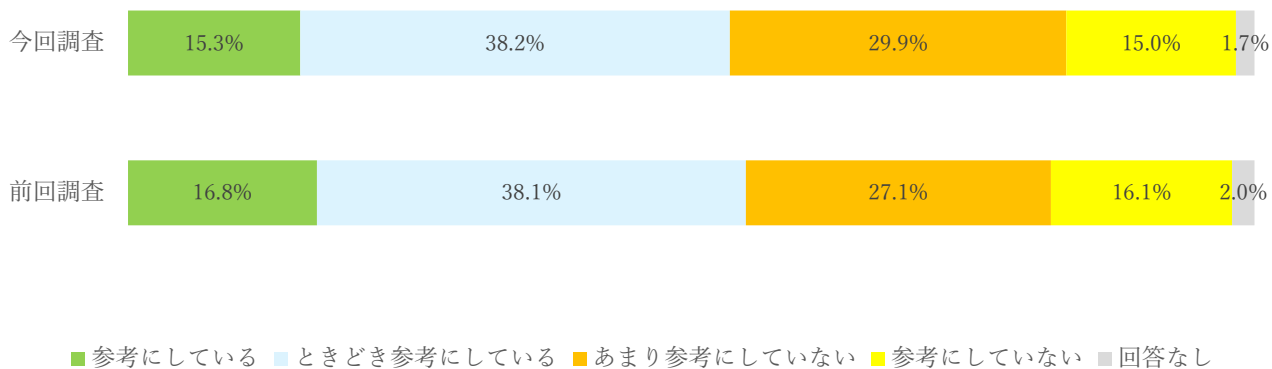
食品購入時に栄養成分表示を参考にしているか

【一般】



■参考にしている ■ときどき参考にしている ■あまり参考にしていない ■参考にしていない ■回答なし

(前回調査との比較)



【外国人】



■食べ残しなどを減らす努力をしている人の割合

一般・・・51.2%

外国人・・・87.2%

【一般】

食品を買いすぎない、作りすぎないなど食べ残しを減らす努力をしている人は、51.2%となっています。

（前回調査との比較）

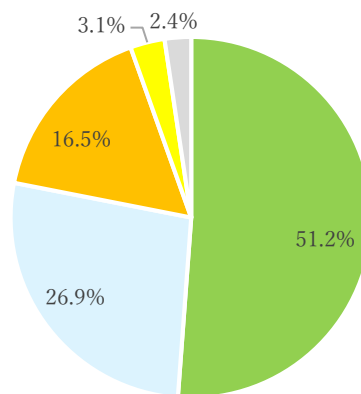
食べ残しを減らす努力をしている人の割合は、ほぼ横ばいとなっています。

【外国人】

選択肢が異なるため、単純に比較はできませんが「している」（87.2%）は一般より高い割合となっており、環境へ配慮している人が多くなっています。

食べ残しを減らす努力をしているか

【一般】



■ している ■ ときどきしている ■ 気にかけているが、なかなかできていない ■ していない ■ 回答なし

（前回調査との比較）



■ している ■ ときどきしている ■ 気にかけているが、なかなかできていない ■ していない ■ 回答なし

【外国人】

外国人



■ している ■ していない ■ 回答なし

(4) 地域の食文化の魅力発信

■成田市の地場産物（さつまいもや米など）の認知度

一般	・・・62.7%
小中学生	・・・77.8%
高校生	・・・39.7%
外国人	・・・72.3%

【一般】

成田市の地場産物を知っている人は、62.7%となっています。

年代別では、70歳代以上で知っている人の割合が最も多くなっている一方、20歳代では知っている人の割合が最も少なくなっています。

（前回調査との比較）

成田市の地場産物を「知っている」との回答は、大幅に増加しており、認知度は高まっています。

【小中学生】

成田市の有名な農産物については、「知っている」との回答が小学5年生で81.1%、中学2年生で74.3%となっています。

（前回調査との比較）

前回調査と比較すると、「知っている」との回答が小学5年生・中学2年生ともに、大幅に増加しており、成田市の有名な農産物の認知度が高まっています。

【高校生】

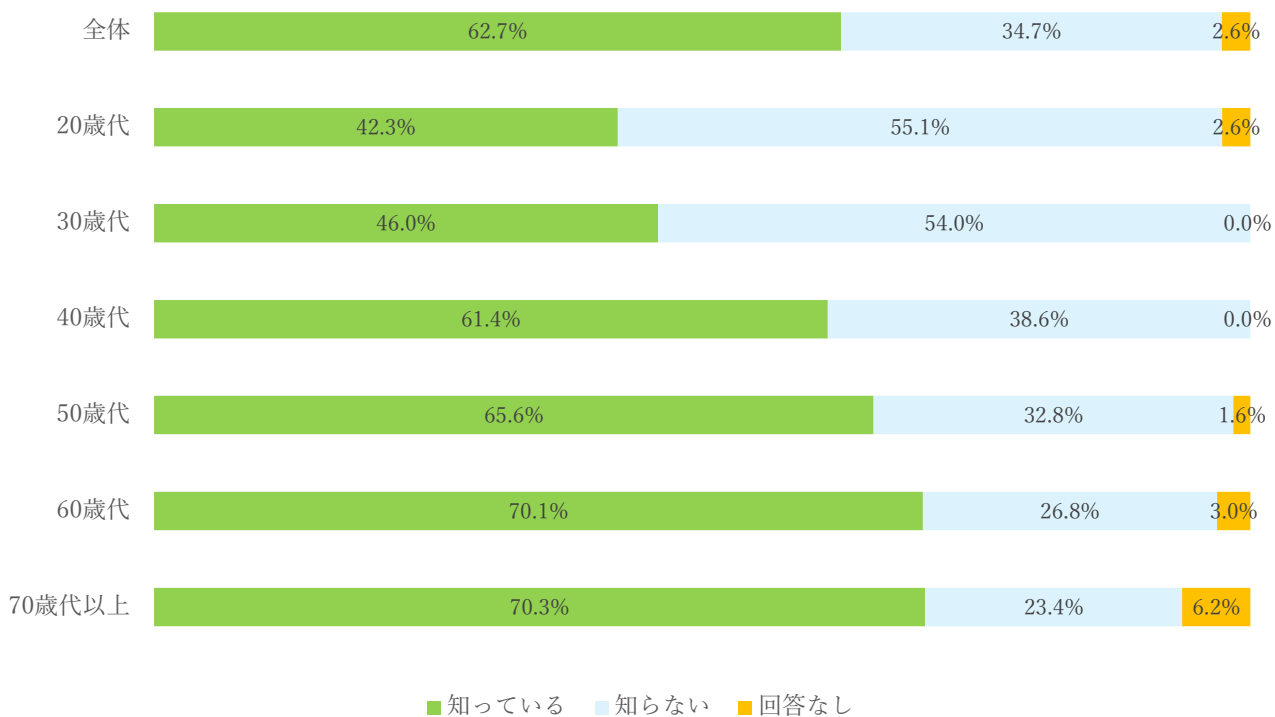
成田市の有名な農産物を知っている人は、39.7%となっており、小学5年生・中学2年生と比較し、低い割合となっています。

【外国人】

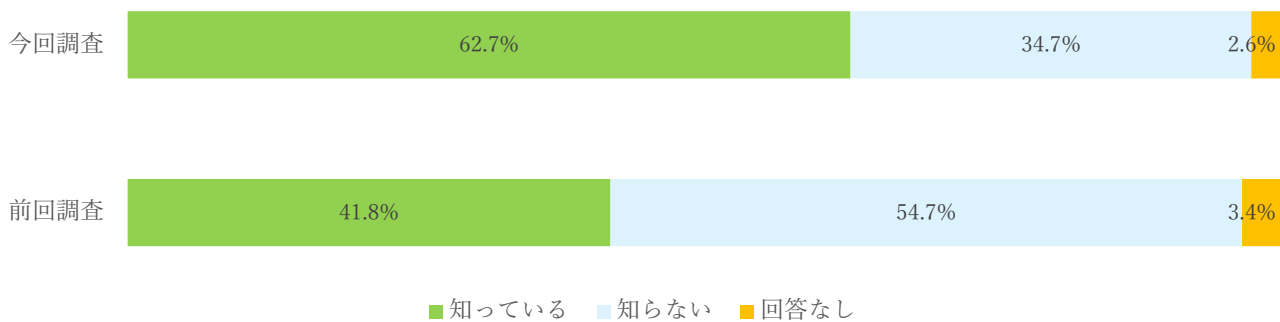
成田市の地場産物を知っている人は、72.3%となっており、一般と比較し、高い割合となっています。

成田市の地場産物を知っているか

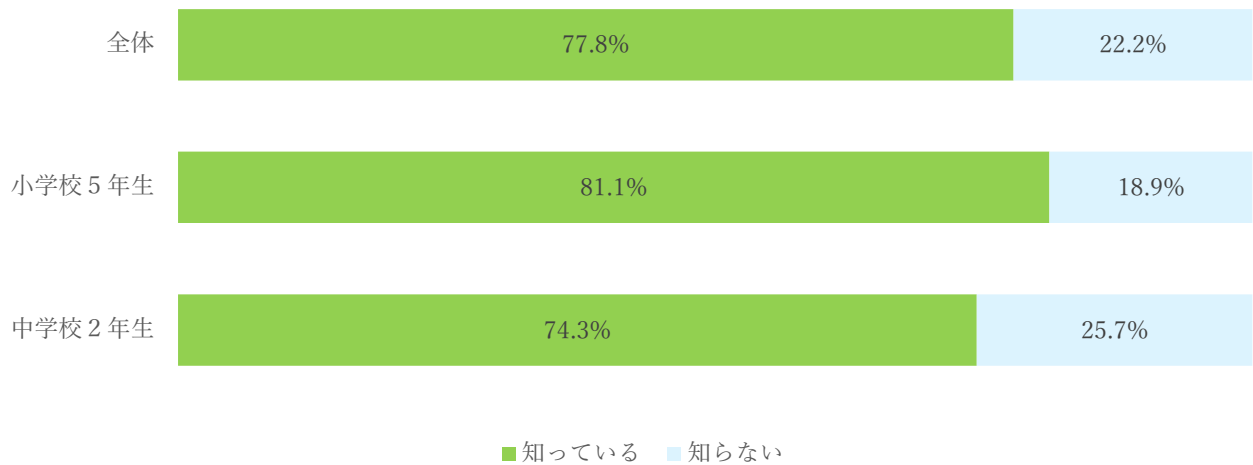
【一般】



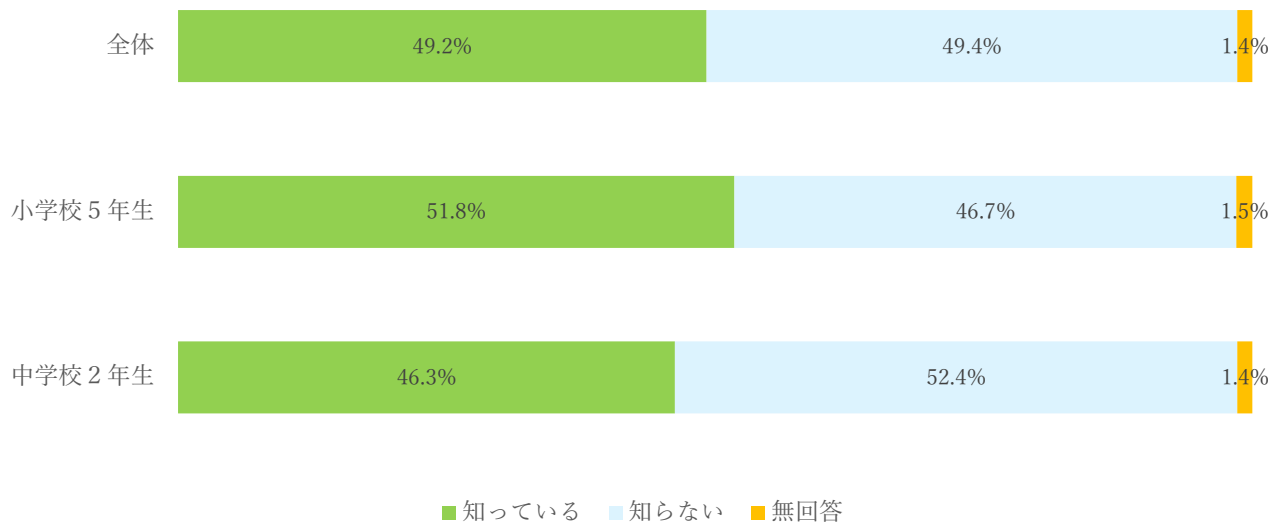
(前回調査との比較)



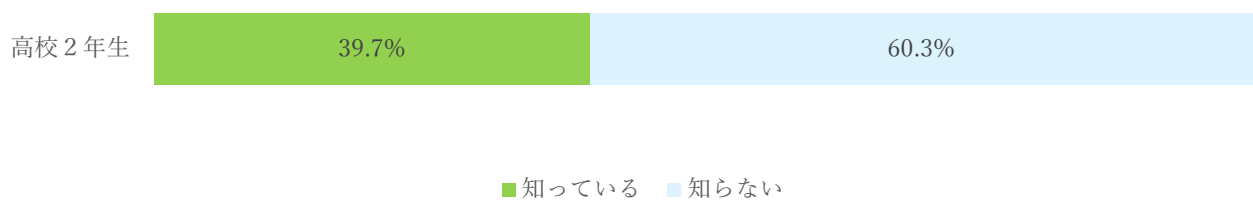
【小中学生】



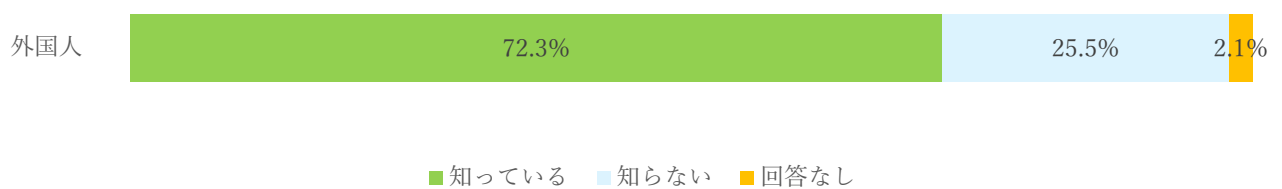
(前回調査)



【高校生】



【外国人】



■成田市の郷土料理（昔からある料理）の認知度

一般・・・15.0%

外国人・・・70.2%

【一般】

成田市の郷土料理を知っている人は、15.0%となっています。

また、具体的な郷土料理としては、「うなぎ料理（うなぎの蒲焼き、うなぎ重、うなぎ丼）」（74人）、「鉄砲漬け」（33人）、「太巻き寿司、祭り寿司、飾り寿司」（26人）などの料理が上位にあげられています。

（前回調査との比較）

成田市の郷土料理を知っている人の割合は、ほぼ横ばいとなっています。

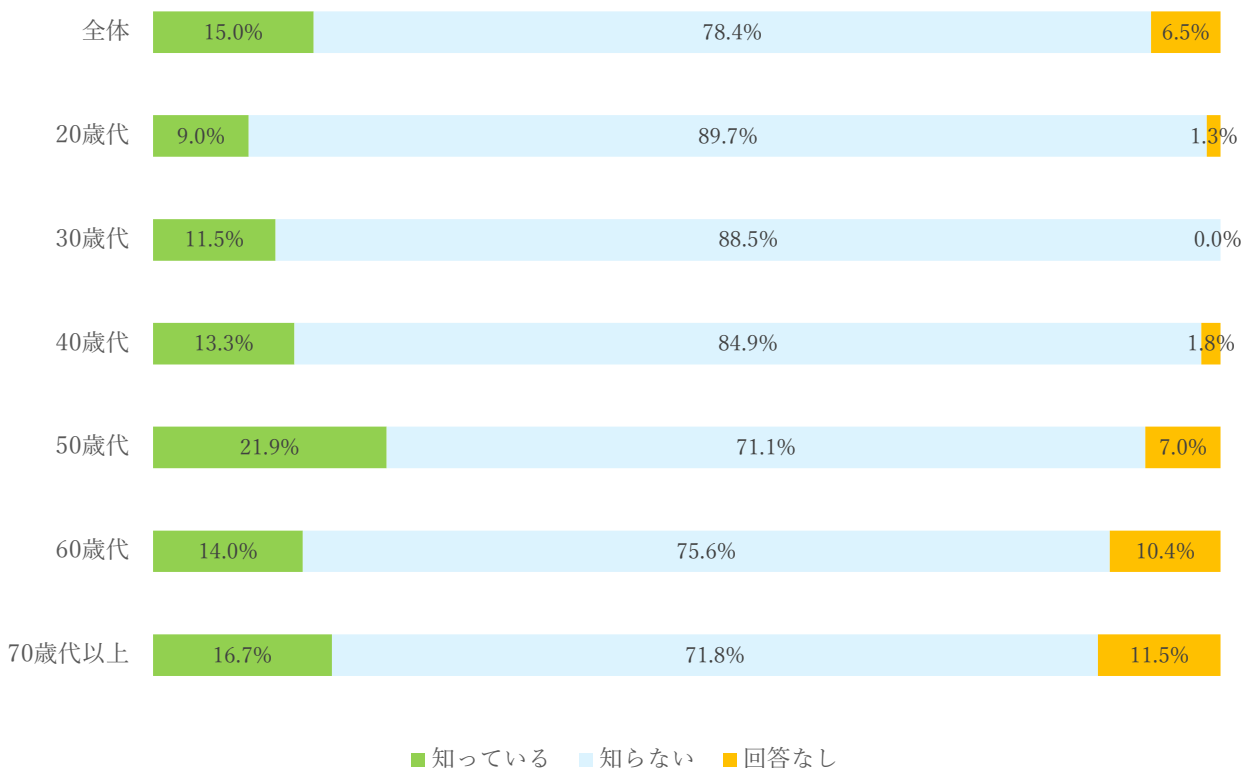
【外国人】

成田市の郷土料理を知っている人は、70.2%となっており、一般と比較し、高い割合となっています。

また、具体的な郷土料理としては、「うなぎ料理」（31人）、「ようかん」（6人）、「鉄砲漬けなどの漬物」（5人）などの料理が上位にあげられています。

成田市の郷土料理を知っているか

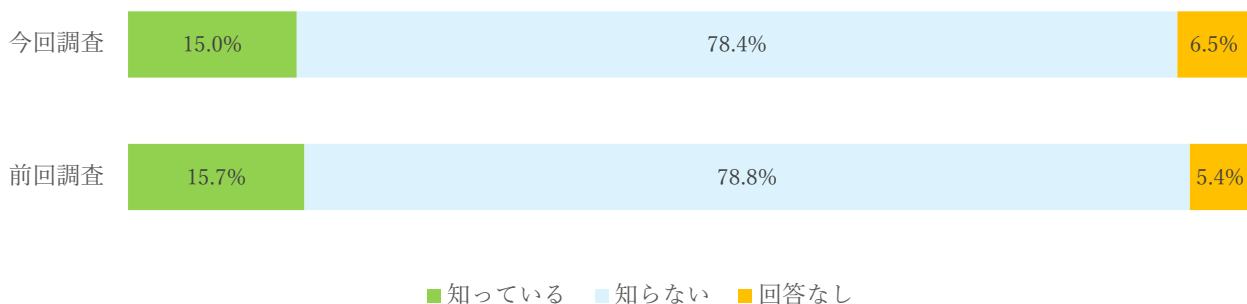
【一般】



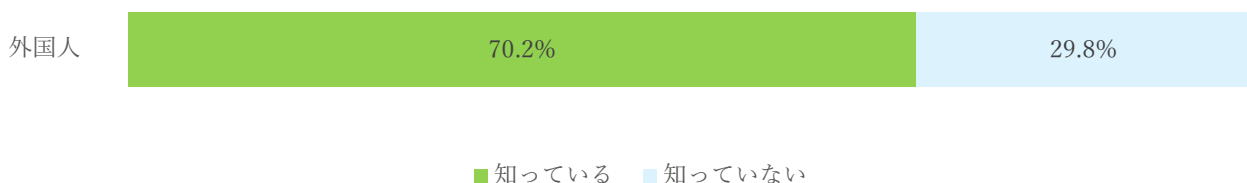
<具体的な郷土料理>

順位	内容	人
第1位	うなぎ料理（うなぎの蒲焼き、うなぎ重、うなぎ丼）	74
第2位	鉄砲漬け	33
第3位	太巻き寿司、祭り寿司、飾り寿司	26
第4位	ようかん・栗ようかん	12
第5位	川魚料理（川魚の甘露煮、鯉こく、鯉の洗い）	7
第6位	ピーナッツ味噌	6
第6位	佃煮	6
第8位	きんぴら	4
第8位	大浦ごぼうの煮付	4
第8位	漬物	4
その他	（みつめの）ぼたもち、芋の煮っころがし、坊入 等	—

（前回調査との比較）



【外国人】



<具体的な郷土料理>

順位	内容	人
第1位	うなぎ料理	31
第2位	ようかん	6
第3位	鉄砲漬けなどの漬物	5
その他	黒饅頭、栗、ブルーベリー、れんこん、さつまいもなど	12

(5) 市に期待することについて

■食育について、市に期待することは

【一般】

市に期待する食育に関する施策では、「地元農産物を購入できる直売所などの情報を発信する」(45.5%) が最も多く、次いで「学校や幼稚園、保育園での作物栽培や、料理などの体験の機会を増やす」(36.8%)、「学校給食の充実を図る」(36.6%) が主な回答となっています。

年代別では、20～30 歳代で「学校給食の充実を図る」、40 歳代で「学校や幼稚園、保育園での作物栽培や、料理などの体験の機会を増やす」、50 歳代以上で「地元農産物を購入できる直売所などの情報を発信する」との回答が最も多くなっています。(20 歳代は、「地元農産物を購入できる直売所などの情報を発信する」も同率。)

(前回調査との比較)

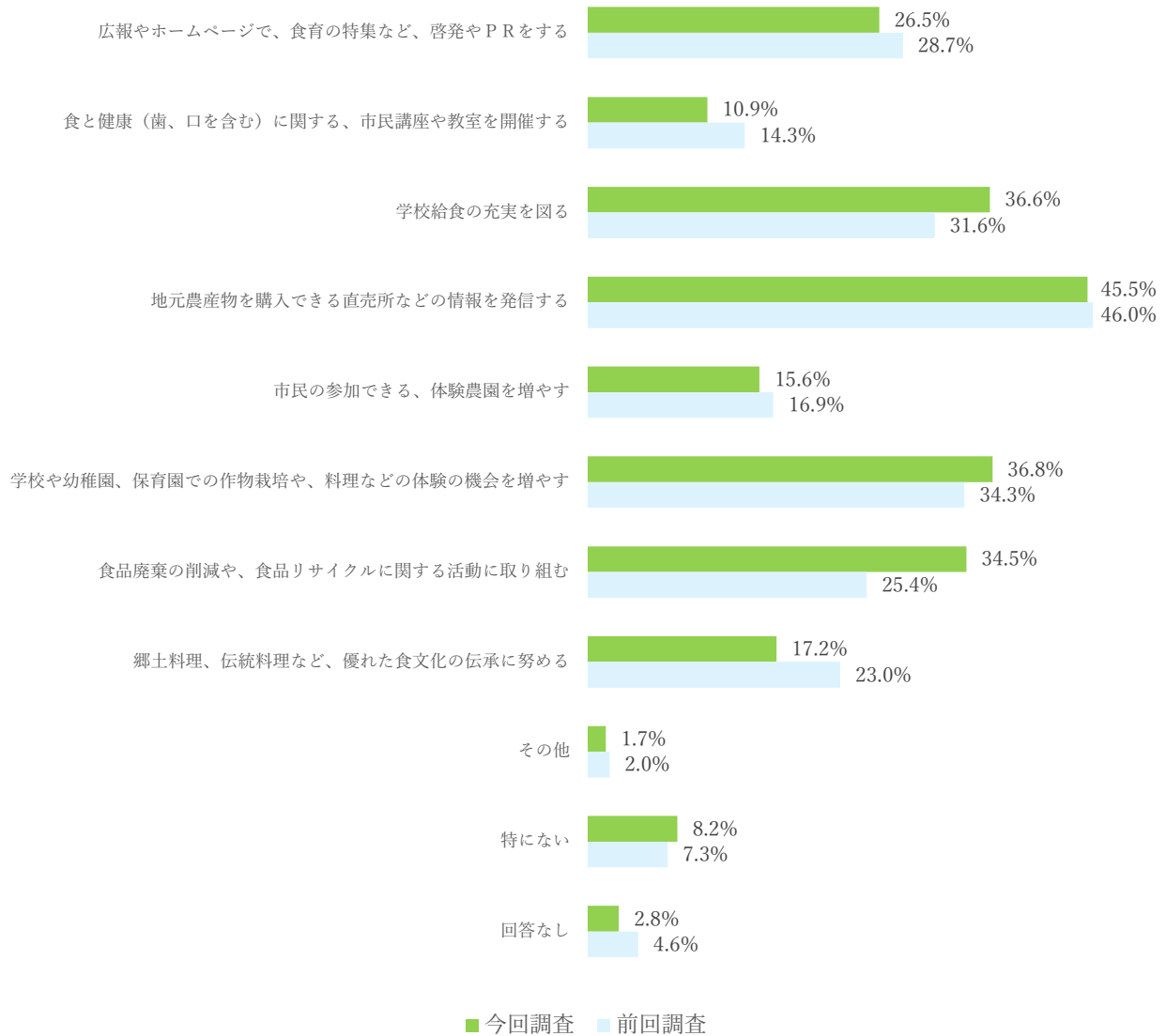
「地元農産物を購入できる直売所などの情報を発信する」、次いで「学校や幼稚園、保育園での作物栽培や、料理などの体験の機会を増やす」、「学校給食の充実を図る」という上位 3 項目は変わりません。

食育に関して市に期待すること（複数回答）

【一般】

		回答者数	ど、 広報や ホームページで、 啓発やPRをする	食と健康（歯、口を含む）に関する、 市民講座や教室を開催する	学校給食の充実を図る	地元農産物を購入できる直売所などの 情報を発信する	市民の参加できる、体験農園を増やす	学校や幼稚園、保育園での作物栽培 や、料理などの体験の機会を増やす	食 品 廃 棄 の 削減や、食 品 リ サ イ ク ル に 関 する 活 動 に 取 り 組 む	郷土料理、伝統料理など、優れた食文 化の伝承に努める	その他	特になし	回答なし
全体		844人	26.5%	10.9%	36.6%	45.5%	15.6%	36.8%	34.5%	17.2%	1.7%	8.2%	2.8%
年代	20歳代	78人	17.9%	12.8%	33.3%	33.3%	15.4%	32.1%	28.2%	24.4%	0.0%	15.4%	1.3%
	30歳代	87人	11.5%	8.0%	60.9%	33.3%	19.5%	56.3%	40.2%	14.9%	0.0%	4.6%	0.0%
	40歳代	166人	13.9%	4.8%	53.6%	34.3%	21.1%	56.6%	39.8%	17.5%	3.6%	5.4%	0.0%
	50歳代	128人	28.1%	13.3%	30.5%	51.6%	20.3%	34.4%	32.8%	17.2%	3.1%	5.5%	4.7%
	60歳代	164人	36.0%	13.4%	30.5%	56.7%	12.8%	29.9%	32.3%	15.2%	1.2%	7.3%	2.4%
	70歳代以上	209人	37.8%	12.9%	22.5%	51.2%	9.1%	22.5%	34.0%	17.2%	1.0%	11.5%	6.2%

(前回調査との比較)



3 ワークショップの開催

10 歳代後半から 20 歳代前半の若い世代の食についての意識を把握するため、市内大学のご協力を得てワークショップを開催しました。また、空港を有する本市の立地や特色を生かし、新たな意見を発掘するため、市内民間企業のご協力を得てワークショップを開催しました。

①国際医療福祉大学×成田市 ワークショップ

項目	内容
開催日	令和 4（2022）年 7 月 2 日（土）
開催場所	国際医療福祉大学成田キャンパス WA 棟 2 階 TBL 室
参加者	国際医療福祉大学の学生 46 名、事務局 11 名
テーマ	○年間 570 万トンの食品ロス！どうしたら食品ロスは減るのでしょうか？ ○いもや米！どうしたら成田市の地産地消は進んでいくのでしょうか？ ○食育って知ってる！？デジタル技術を活用して食育を推進するには？ ○早寝早起き朝ごはん！どうしたら朝食習慣は定着するのでしょうか？
方法	参加者は 8 つのグループに分かれ、それぞれのテーマについて、付箋に意見を書き出し、現状や課題、具体的な解決方法などについて話し合いました。 最後に、グループで出された意見に対しドット投票※を行い、内容を確認した後、同一テーマを討論したグループ同士で意見を共有しました。

※ドット投票

全員に丸いシールを同数ずつ渡し、共感する内容や良いと思うアイデアを選び投票する方法。



< 挙げた意見 >

- ・ 可食部を捨てずに食べられるレシピ等を SNS 発信
- ・ (料理教室や農林漁業体験などを) オンラインで体験する
- ・ 学校で食育授業&農家体験
- ・ (食に関するガイドブックなど) 色々な言語の説明を用意

②ANA×成田市 ワークショップ

項目	内容
開催日	令和4（2022）年7月19日（火）
開催場所	ANA 成田スカイセンター
参加者	ANA グループ社員 12 名、成田市職員 8 名
テーマ	○シフト勤務者の食生活は！？ より良い食事をするにはどうすれば良いのでしょうか？ ○SDGs と食育！ 私たちに出来ることは何でしょうか？
方法	参加者は 2 つのグループに分かれ、それぞれのテーマについて、付箋に意見を書き出し、現状や課題、具体的な解決方法などについて話し合いました。 最後に、グループで出された意見に対し、ドット投票を行い、内容を確認した後、グループ同士で意見を共有しました。



＜挙げた意見＞

- ・会社が食にフォーカスをあてる
- ・大人だけで参加できる農業体験の実施
- ・コンビニでも栄養がとれるガイドブックの発行
- ・to go box（持ち帰り BOX）の普及
- ・栄養士のレシピを食卓で食べられるようにする

4 今後の課題

第2次計画の課題や食についての状況、食育に関するアンケート結果等を踏まえた、今後の課題や方向性として以下のとおりまとめます。

(1) 第2次計画の課題

第2次計画の達成状況から、市民による望ましい食生活の実践が十分に進んだとはいえない状況です。実践が進まない要因としては、新型コロナウイルス感染症の影響で、食育に係るイベント等が中止・縮小されたことにより、従前と比較し、食育が普及できなかったことが挙げられます。今後については、各ライフステージにおいて、with コロナ時代に対応した食育の普及・推進が必要になっています。

一方、「食育に関心を持っている人の割合」や「成田市の地場産物の認知度」など、目標は達成していませんが、改善傾向にある指標もあり、引き続き推進をしていく必要があります。

(2) 食を取り巻く国・県の状況

- 人口減少、少子高齢化、世帯構造の変化や中食市場の拡大が進行するとともに、食に関する国民の価値観や暮らしの在り方も多様化し、健全な食生活を実践することが困難な場面も増えてきています。
- 食料自給率（令和3年度）は、カロリーベースで38%、生産額ベースで63%と食料の多くを海外からの輸入に頼っている一方、令和2年度推計で食品ロス522万トンが発生しています。
- 新型コロナウイルス感染症の影響により、在宅時間や家族で食を考える機会が増えることで、食を見つめ直す契機となっており、家庭での食育の重要性が高まっています。
- 令和3（2021）年3月に策定された国の「第4次食育推進基本計画」では、「生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進」「持続可能な食を支える食育の推進」「『新たな日常』やデジタル化に対応した食育の推進」を重点事項に掲げており、相互に連携して総合的に推進していく必要があります。
- 令和4（2022）年3月に策定された県の「第4次千葉県食育推進計画」では、全国有数の農林水産業が盛んな本県の特徴を活かし、「ちばの恵み」を取り入れたバランスのよい食生活の実践による生涯健康で心豊かな人づくりが推進されています。
- 国や県の食育推進計画では、食育の推進は、SDGsの目標達成に寄与するものであるとし、SDGsの考え方を踏まえた食育の取り組みを位置付けています。

（３）食をめぐる市民（在学・在勤含む）の動向

①一般市民（20 歳以上）の食生活について

■食育

- 食育の認知度は高まっています。
- 食育への関心や実践についても増加傾向にあります。

■食生活

- 朝食の欠食状況は、20 歳代の女性の欠食率が高い状況となっています。
- 朝食を食べない理由としては、「時間がない」との回答が多くなっています。
- 栄養バランスのとれた食事を心がけている人は減少しています。また、特に成人の若年層について、栄養面を気にしている人の割合が少なくなっています。
- 週 1 回も家族や友人と一緒に食事をとっていない人の割合が増加しています。
- 食べ残しを減らす努力をしている人の割合は、ほぼ横ばいとなっています。
- 食品を購入するとき、栄養成分表示を参考にしている人の割合は、ほぼ横ばいとなっています。
- 食品を選ぶときに気をつけていることは、「賞味（消費）期限」が最も関心の高い項目となっています。

■地産地消・食文化

- 地産地消を知っていて実践している人は、前回調査に比べ増加しています。
- 地場産物の認知度は前回調査時と比較すると、大幅に高まっており、関心の高さがうかがえます。一方、郷土料理の認知度については、ほぼ横ばいとなっており、まだまだ低い状況にあります。
- 市に期待することとして、「地元農産物を購入できる直売所などの情報発信」が求められています。

■農業体験

- 農業体験をしたことがある人の割合は、ほぼ横ばいとなっています。また、農業体験がない人の今後の体験希望では、「してみたいとは思わない」との回答が多くなっています。
- 子ども達の食育を進めるうえで、農業に関する体験が必要だと思っている人の割合は増加しています。

②小・中学生（義務教育学校含む）の食生活について

■食育

○食育の認知度は改善傾向にありますが、まだまだ低い状況にあります。

■食生活

○朝食の摂取状況は、小学生では欠食率が高まっていますが、全体では改善傾向にあります。

○朝食を食べない理由としては、「時間がないから」との回答が多くなっています。

■地産地消・食文化

○有名な農産物の認知度は前回調査時と比較すると、大幅に高まっており、関心の高さを伺えます。

■農業体験

○学校以外で体験したことのある農業体験では、「いもほり」「野菜のしゅうかく」「もちつき」との回答が上位にあげられている一方、「したことがない」との回答が増加傾向にあります。

③高校生の食生活について

■食育

○食育の認知度は、小中学生と比較すると、低い状況にあります。

■食生活

○朝食の摂取状況では、小中学生と比較すると、欠食率は高くなっています。

○朝食を食べない理由としては、「時間がないから」との回答が多くなっています。

■地産地消・食文化

○有名な農産物の認知度は、小中学生を大幅に下回ることから、興味関心を高める必要があります。

■農業体験

○学校以外で体験したことのある農業体験では、小中学生と同様に「芋掘り」「野菜の収穫」「餅つき」との回答が上位にあげられています。また、「したことがない」割合は、小中学生と比較し高い状況にあります。

④外国人（ALT 関係者）の食生活について

■食育

- 食育の認知度及び関心を持っている人は、一般を下回っています。また、食育を実践している人についても、認知度や関心を持っている人に比例して一般よりも低い傾向にあります。

■食生活

- 朝食の摂取状況は、一般と比較すると欠食率が高くなっています。
- 栄養基準などを参考にしている人は一般を大きく上回っており、健康に配慮していることがうかがえます。
- 週 1 回以上家族や友人と食事をしている人は、一般を上回っており、共食の意識が高いことがうかがえます。
- 食べ残しを減らす努力をしている人は、一般を上回っており、環境に配慮していることがうかがえます。
- 食品を購入するとき栄養成分表示を参考にしている人は、一般を上回っており、栄養バランスのとれた食事を心がけていることがうかがえます。

■地産地消・食文化

- 成田市の地場産物の認知度は、一般より高い割合となっています。

（４）今後の課題や方向性

■食育

- 食育の認知度や関心は高まっていますが、実践に向けた行動を促すことが必要となっています。また、特に 20 歳代で食育に関心がない人が多く、若年層に向けた食育の周知・啓発が必要になっています。
- 様々な世代に対して食育を推進するためには、with コロナ時代における多様な暮らしに応じた施策を、民間企業や大学等と連携を図り展開していく必要があります。

■食生活

- 栄養バランスのとれた食生活の実践に向けた意識付けが必要となっています。
- 朝食の欠食率については、国・県と比較すると、本市の状況は良好です。
欠食の理由としては「時間がない」が最も挙げられていることから、朝食の習慣化や重要性を継続して示していく必要があります。
- 家族や友人とともに食事をとることで、コミュニケーションを図り、豊かな心が育まれるよう、共食を推進していく必要があります。
- 食品ロスなどを減らし、持続可能な食を支える食育を推進していく必要があります。

■地産地消・食文化

- 地元農産物を購入できる直売所などの情報発信のさらなる強化が必要になっています。
- 地場産物の消費による食料の輸送に伴い環境負荷の低減や地域の活性化は、持続可能な食の実現につながることから、未来を担う子どもたちへのさらなる推進が求められます。
- 地場産物の認知度は、地産地消ガイドマップの配布や市場による PR、農業体験や教育活動の成果等により上昇しているものを引き続き高めていくとともに、郷土料理に触れる機会を創出し、地域や家庭で受け継がれてきた伝統的な料理や作法等の継承が求められています。

■農業体験

- 食育への意識を高めるためにも、農産物を育て、収穫する喜びを知ることが重要であり、体験機会を充実していく必要があります。
- 様々な学習や食に関する体験活動を通じて、消費者と生産者との交流を図り、産地や生産者への意識を養う必要があります。

■その他

- 新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえ、デジタルツールやインターネットを活用し、「新しい生活様式」に対応した食育の推進が必要となっています。
- 国際都市である本市の状況を踏まえ、多文化共生の観点からも食育を発信していくことが求められています。
- 家庭・地域社会・行政などの多様な参画主体の連携が引き続き必要となっています。
- 近年、台風や豪雨等による大規模災害が発生しており、災害時の食の備えの重要性について、食育の観点から必要な知識の普及啓発が求められています。